太宰府市の文化財　第15集

太宰府天満宮 II

——太宰府天満宮境内地発掘調査報告書 第2集——

平成2年

太宰府市教育委員会

太宰府天満宮 II

___防火用進入路設置と祖霊殿建設に伴う___
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２年

太宰府市教育委員会

調 査 地 遠 望（アジア航測株式会社撮影）

序

太宰府天満宮と言えばいまその名前を知らない方は少ないのではないでしょうか。学問の神様として現代の受験戦争時代を反映し、年末年始に限らずその繁栄ぶりには驚くべきものがあります。御本殿の地下深く眠っておられると伝えられている菅原道真公は、今の時代をどのようにご覧になっているのでしょうか。

さて、今回私達が調査いたしました地点は、この太宰府天満宮の境内から少し東側に入った木立の生い茂る丘陵地に当たります。調査の成果として中世のお墓をはじめとする数々の文化財が見いだされ、太宰府の歴史を知る上で貴重な発見があったと聞いております。それと同時に新たな疑問や問題点も見いだされており、太宰府市の中でもここ太宰府天満宮周辺は、重要な地点であることを再認識したものでありました。

ここにその調査の成果を公にし、一人でも多くの方々に埋蔵文化財の大切さを認識していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成に当たりましてご協力いただきました太宰府天満宮当局に対して感謝申し上げると共に、技師と一体になって調査に参加されました作業員の方々に対してお礼申し上る次第であります。

太宰府市教育委員会
教育長　長　野　治　己

例　　言

1．本書は昭和62年度に太宰府市教育委員会が実施した、太宰府天満宮境内地に於ける第２次調査の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び出土遺物の整理は太宰府天満宮の委嘱を受けて、太宰府市教育委員会が実施した。調査関係者及び整理関係者は第２章に記した。

3．遺構実測図及び遺構写真は、狭川真一、永見秀徳、瀬口眞司、藤城　泰、遺物実測図は、狭川、瀬口、遺物写真は、狭川、製図は城戸康利、山田富美、狭川が行った。

4．検出遺構の空中写真は（有）空中写真　稲宮が行った。

5．調査地の航空写真測量図化はアジア航測株式会社福岡支店に委託した。

6．出土した金属製品の保存処理は狭川麻子が行った。

7．本書中における方位は地形図がG.N.、遺構図がM.N.を示している。

8．本書の執筆は遺構に関する一部を瀬口が担当した他は、狭川が担当した。

9．本書の編集は狭川が担当した。なお編集に際して緒方俊輔の協力を得た。

目　　次

1．位置と環境……1
2．調査経過……3
3．調査の概要……7
4．調査のまとめ……26

1. 太宰府天満宮境内地遺跡
2. 大野城跡
3. 岩屋城跡
4. 原山無量寺跡
5. 鴻城跡
6. 安楽寺跡
7. 宝満山遺跡群
8. 馬場遺跡
9. 新町遺跡
10. 推定金光寺跡
11. 国分瓦窯跡
12. 筑前国分寺跡
13. 陣ノ尾遺跡
14. 筑前国分尼寺跡
15. 国分千足町遺跡
16. 御笠軍団印出土地
17. 連賀軍団印出土地
18. 大宰府跡
19. 観世音寺
20. 大宰府条坊跡(推定域)
21. 若ヶ畑遺跡
22. 仲ノ浦遺跡
23. 結ヶ浦火葬墓
24. 般若寺跡
25. 市ノ上遺跡
26. 剣塚古墳
27. 杉塚廃寺
28. 唐人塚遺跡
29. 塔原廃寺
30. 稲田山遺跡
31. 泰仙遺跡
32. 峰火葬墓
33. 修理山遺跡
34. 茶臼火葬墓
35. 通り浦遺跡
36. カケ塚遺跡
37. 野黒坂遺跡
38. 武蔵寺
39. 原口古墳
40. 古ヶ浦遺跡
41. 今王古墳群
42. 都塚古墳群
43. 下高尾古墳
44. 五条遺跡
45. 古ヶ浦4号墳
46. 六本松遺跡
47. 六本松古墳
48. 塚口古墳群
49. 御笠地区遺跡群
50. 六度古墳
51. 尺ヶ浦古墳
52. 大谷古墳
53. 星隈古墳
54. 阿志岐古墳群

Fig. 1　太宰府市周辺主要遺跡分布図（1/50,000　建設省国土地理院発行『太宰府』『二日市』）

1．位置と環境

調査地は、太宰府天満宮の東側に広がる標高110m～130m程の丘陵に位置する。この丘陵は現在、団地造成により所々が失われているが、太宰府市の東に南北に長く延びる低丘陵地帯を成している。周辺の団地造成が古く、この丘陵における文化財の存在はあまり知られていなかったが、丘陵のすぐ東側は宝満山遺跡群であり、古代官人の葬地や天台系寺院である竈門山寺が知られると共に、近代まで修験道の山として著名でありそれらに関係する様々な遺跡が宝満山の西斜面に展開していることや、丘陵西裾に安楽寺跡（現在の太宰府天満宮）をはじめとする古代から中世にわたる遺跡が密集し、両者に挟まれるような形で存在するこの丘陵には、文化財の遺存している可能性が充分考えられるところである。今時の調査の他、平成元年度に当市が調査した石穴遺跡（中世城跡及び中世墳墓）はその代表的な遺跡として捉えられる。

太宰府天満宮の歴史については過去多くの書物が刊行され周知のとおりであるが、中世までの年表は『太宰府天満宮』（太宰府天満宮境内地発掘調査報告書第１集）に併載したので参照されたい。また参道を中心とした門前町については『太宰府天満宮参道遺跡』（太宰府市の文化財第16集）において詳述する予定であるため本稿では触れないでおく。

太宰府天満宮のある丘陵の西対面は大城山の東山麓にあたり、古くから安楽寺と関係の深い原山無量寺の跡が存在する。俗に原八坊と称するこの遺跡の詳細は今後の発掘調査を待たなければならないが、今日まで７次の調査がなされ中世山岳寺院の様相が次第に明らかになりつつあると共に、その地が四王寺山経塚群の一部に当たることも判明しつつある。さらに古代官人の葬地であったことも解明されつつあり、竪穴式石室や、版築工法を用いた墳墓とみられる遺構が発見されるなど興味を引く一帯であると共に埋蔵文化財の重要地域でもある。

またこの遺跡のある山の頂上は水瓶山と呼ばれ、雨乞い信仰で知られていると共にそれに伴うと考えられる多数の経塚が調査されている。さらに同地には法華曼荼羅板碑も存在し、中世の活発な宗教活動が窺われる。

この原八坊の在る山裾には浦城跡が存在していたが、現在は造成され団地と化している。

以上見るとおり、太宰府天満宮（安楽寺跡）の存在する周辺の丘陵は古代末から中世を中心として活発な宗教活動の跡を窺うことのできる地域として特に重要であると言えよう。

（Fig．１．２．巻頭図版）

2．調　査　経　過

昭和61年度に宗教法人太宰府天満宮（宮司　西高辻信良）から、境内地の丘陵及び谷部分に防火用進入路設置と祖霊殿建設の話が太宰府市教育委員会に持ち込まれた。これに対し太宰府市教育委員会では埋蔵文化財の有無を事前に確認する必要のあること、またその存在が認められれば発掘調査を実施する由を伝えた。

その後両者協議の上、昭和62年１月12日から同月いっぱいで試掘調査を実施した。その結果、防火用進入路部分について数ヵ所で焼土壙とみられる遺構を発見したが、祖霊殿建設地点については谷状地形であるうえに多量の土砂の堆積があるのみであり、埋蔵文化財は認められなかった。

この結果に基づいて、防火用進入路部分の必要箇所を調査することに決定し、本調査は太宰府天満宮文化研究所の協力を得て太宰府市教育委員会が、費用負担及び調査に伴う事務全般を宗教法人太宰府天満宮が担当することで協議が成立し、昭和62年６月８日から同年８月28日まで実施した。整理作業については、実際の作業及び事務処理を太宰府市教育委員会が担当し、費用は全て宗教法人太宰府天満宮が負担することで合意し、平成元年度をその期間に充てた。

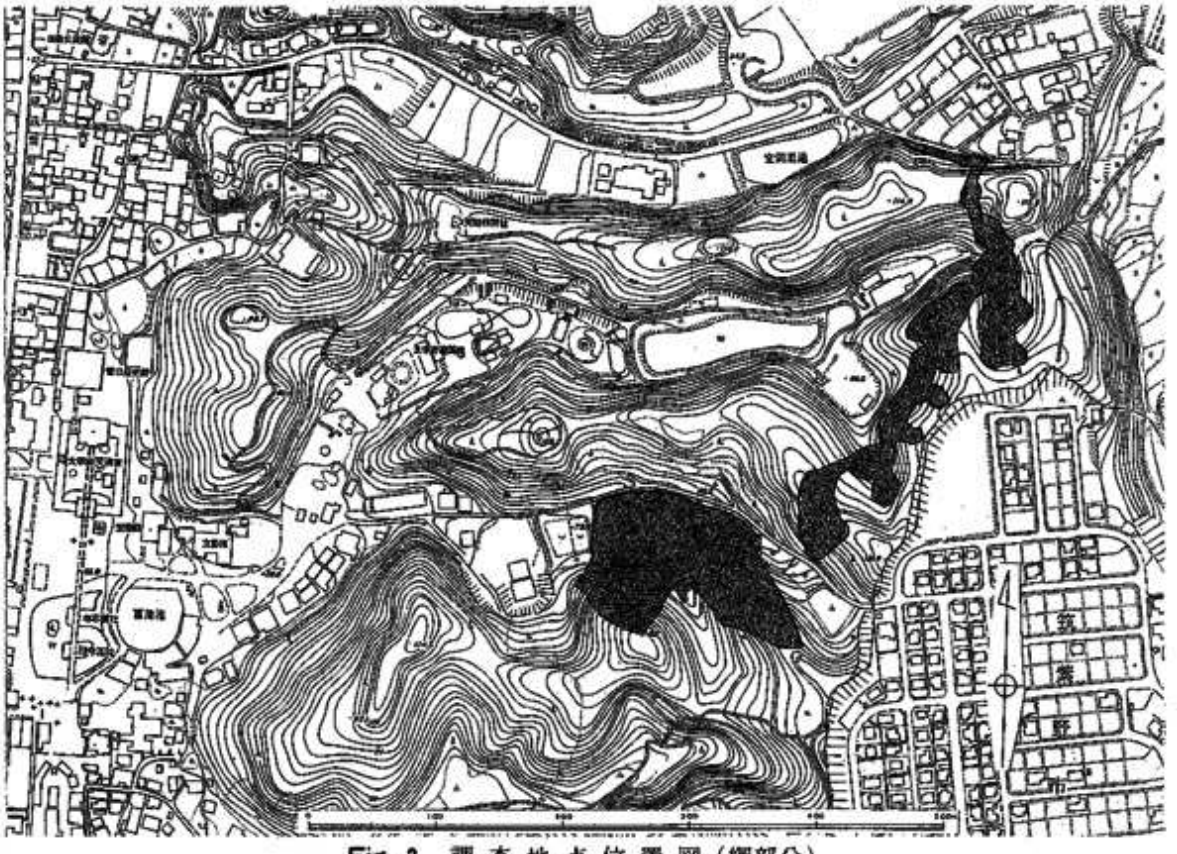


Fig. 2　調査地点位置図（網部分）

調査関係者は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会

教育長　藤　壽人
社会教育課長　花田勝彦
文化財係長　鬼木富士夫
文化財係主事　岡部大治
技師　山本信夫（試掘担当）
狭川真一（調査担当）
緒方俊輔（試掘担当）

太宰府天満宮文化研究所　主事　小西信二（調査担当）

発掘調査参加者（順不同、敬称略）

永見秀徳　瀬口眞司　藤城泰（奈良大学学生）
竹林義之　井上義光　鬼木敏　長尾吉男　長谷鉄男　田部澄博
和田春代　長谷ヒサエ　長谷久子　長谷数代　長谷秀子　日永田シゲ
日永田タミ子　日永田キクエ　日永田タツ子　栗山ヒロ子　吉田正子　渡辺ひとみ
山下沢子　花園美千子　楠林静香　楠林トミキ　岩下恵子　田中平助
八柳健之助　藤原重登　三上智久　佐藤正光　中島タキノ　中島タカ子
松島順子　白水イセノ　田原智恵子　高原改良子　白木ハルミ　中嶋はじめ
徳永モモエ　田中テル子　萩尾須磨子　萩尾カネ子　大迫フミ子　江島スミエ
野口義博

整理関係者は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会

教育長　長野治己
教育部長　西山義則
社会教育課長　関岡勉
文化財係長　鬼木富士夫
主事　岡部大治
白水伸司
技師　狭川真一

太宰府天満宮文化研究所　主事　小西信二

整理参加者（順不同、敬称略）

城戸康利　緒方俊輔　狭川麻子　山田富美　瀬口眞司　高橋愛子
堤登美代　檜垣みどり

太宰府天満宮　第2次調査（縮小図）

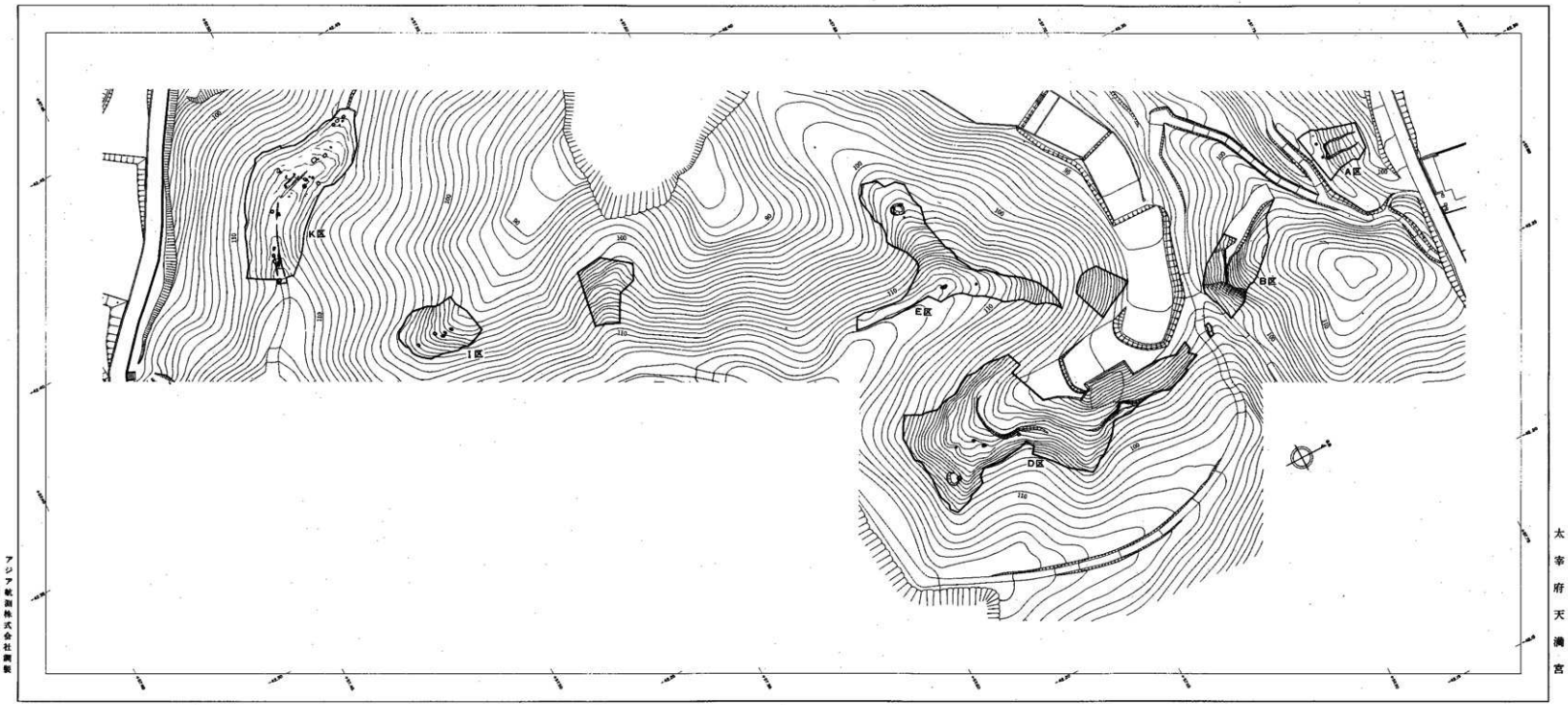


Fig. 3　太宰府天満宮第2次調査全体図（1：1,000）

3．調査の概要

太宰府天満宮第２次調査地点は、開発目的が道路であると言うところから天満宮の東側に広がる丘陵部を南北に長く調査する結果となった。調査は試掘結果及び地形上の条件から調査区をいくつかに区切って設定することとし、調査を開始した北側を起点とし、A～Kまでの地区名を付した。ただしこの地区名は、調査開始前に付しているため報告にあたって割愛したものもある。（Fig．3）

遺構の検出された地区を概観すると、A．D．I．Kの各区で焼土壙、D．E両区で墳墓、B区において石龕列を検出した。以下各区ごとに報告する。

A　区

調査区は南北に延びる丘陵の本筋から、西へ舌状に張り出した尾根の北斜面の一部に設定した。遺構は尾根の頂部からややくだった地点に、焼土壙２基を検出した。（Fig．4　Pla．1）

1．遺　構

焼土壙

1SX001（Fig．5　Pla．5）

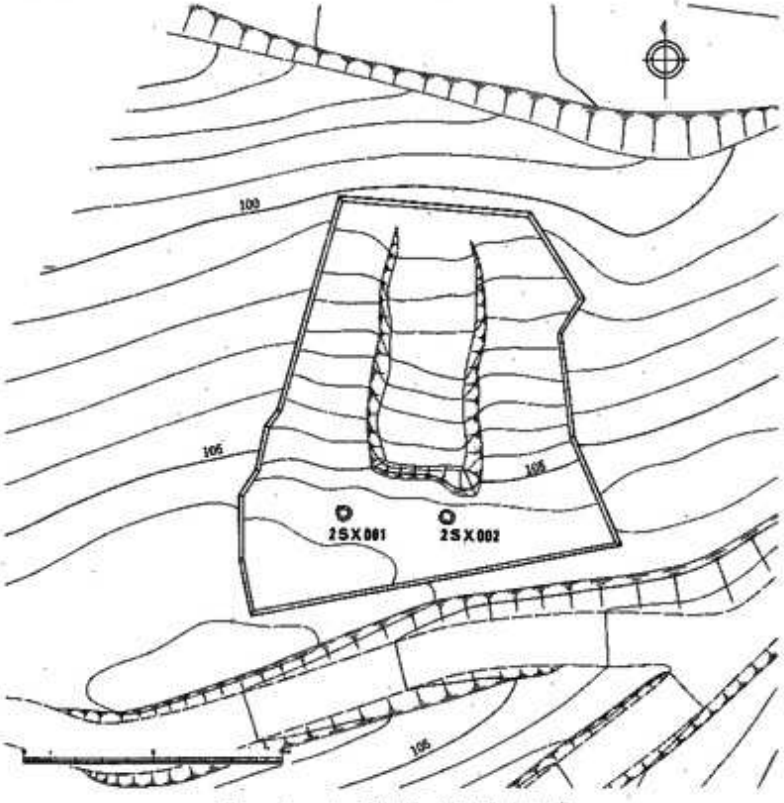


Fig. 4　A 区 遺 構 配 置 図

長軸0.5m、短軸0.5m、深さ0.25m内外の不整隅丸方形を呈する。埋土は、炭化物をわずかに含む上層とそれを多量に含む黒色炭層の二層からなる。土壙の壁面は加熱を受けており赤変している。その範囲は壁面の全面に認められるが、床面には認められない。

1SX002（Fig．5　Pla．5）

長軸、短軸とも0.5m、深さ0.2m内外を測る隅丸方形を呈している。埋土はいく層かに細分可能であるが、基本的には焼土塊を若干含む層の堆積である。1SX001に見られたような黒色炭層は

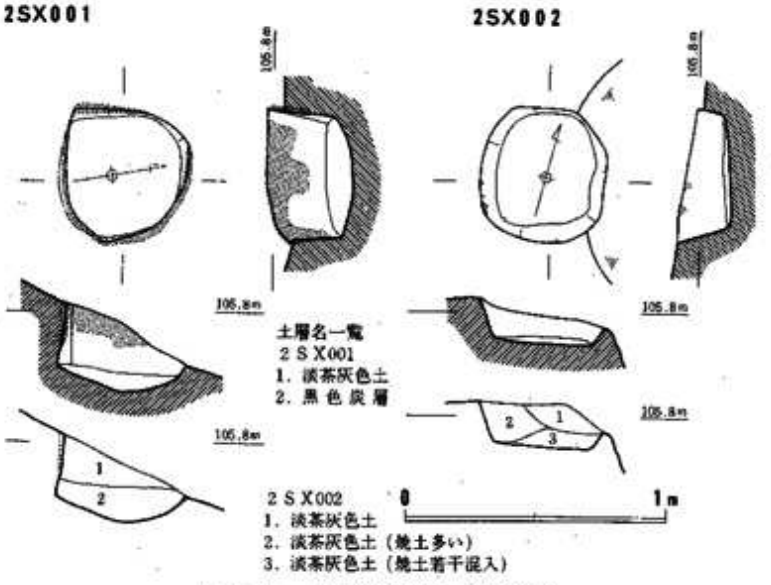


Fig. 5　A区検出焼土壙実測図

認められない。焼壁の一部が遺存している。

2．出土遺物

尾根上表土中に土師器杯の小片を検出したのみで、特に目立った出土遺物はない。

B　区

A区から小さな谷を隔てた丘陵の南西斜面の一部に調査区がある。調査区の南端は切り通しになっており、現在の山道が細々と通っている。遺構は、調査区の中位で東西方向に位置する石龕列を一条検出した。(Fig. 7　Pla. 1)

1．遺　構

石龕列

1SX003 (Fig. 6　Pla. 6，7)

河原石3個をもって一基の石龕を作り、それを多数並列させてひとつの遺構を形成する。斜面に位置しているため土砂等の流出により大半を失っているとともに、谷部分を通る山道造成に関わる切り通しによって東側延長部も現存しないが、現存長8.8mを測り、標高100mのコンターに乗せるかのようにほぼ水平に造営されている。造営に当たっては丘陵の斜面を小さく段状に造成し、その平坦面に石龕列を配置している。

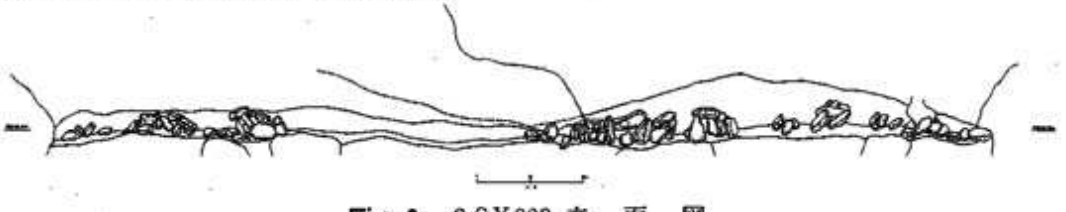


Fig. 6　2SX003 立　面　図

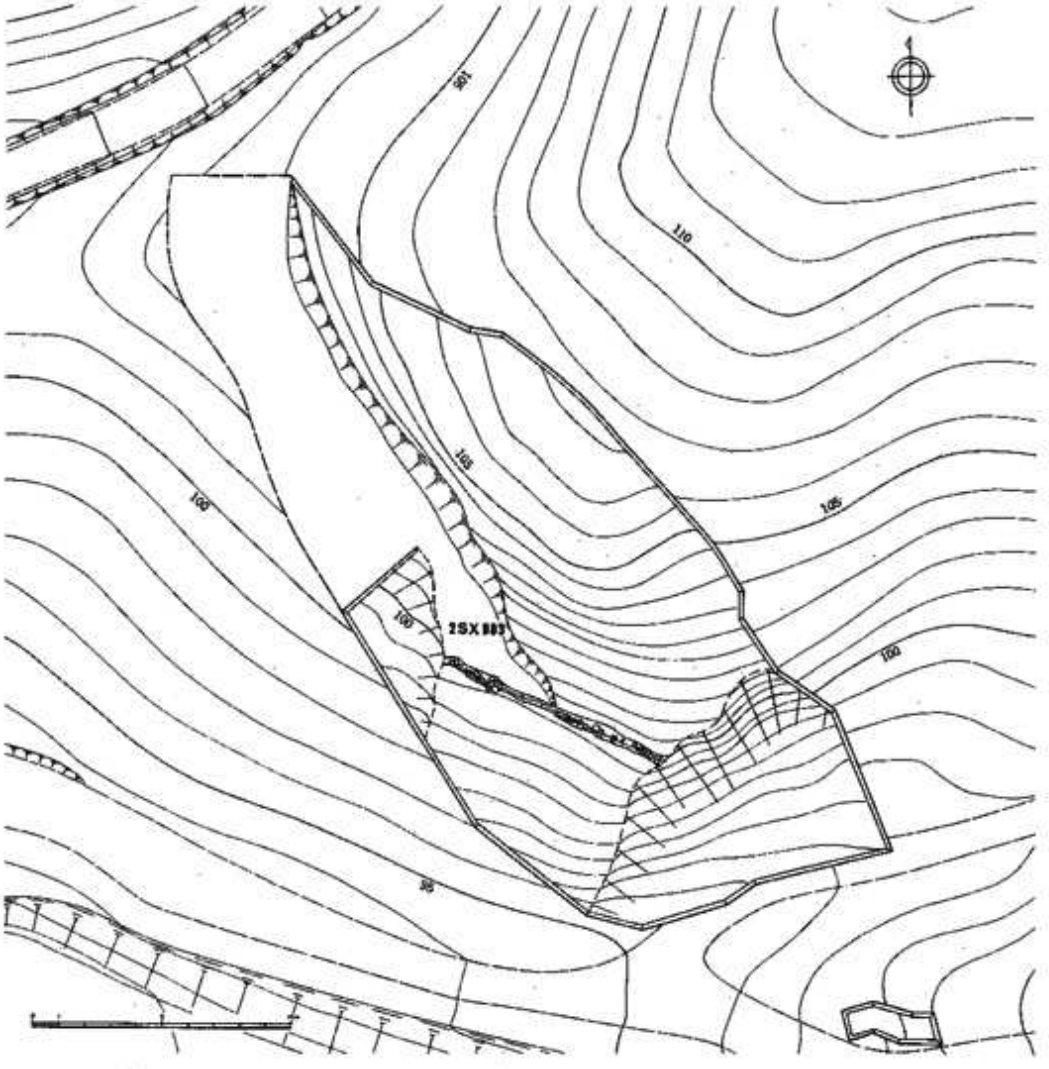


Fig. 7　B 区 遺 構 配 置 図

一基の石龕の法量は高さ約0.2～0.3cm、幅約0.25～0.35mを測り、隣合う石龕は各々独立しており石材を共有しない。石龕中央に一枚の河原石（高さ約8～15cm、幅約7～10cm、厚さ約3～4cm）を置き、主体とする。この河原石のみ石材を異にし、青緑色を呈する片岩を用いている。表面には墨書の痕跡は認められなかった。

2．出土遺物

石龕列に関係するとみられる遺物は、検出されなかった。

D　区

A、B区のある丘陵とE区のある丘陵に挟まれた谷部分の、最も奥まった地点に当り造成の関係から斜面中位以下谷部の一部分に調査区を設定した。調査の結果、谷の奥部分で焼土壙4基、

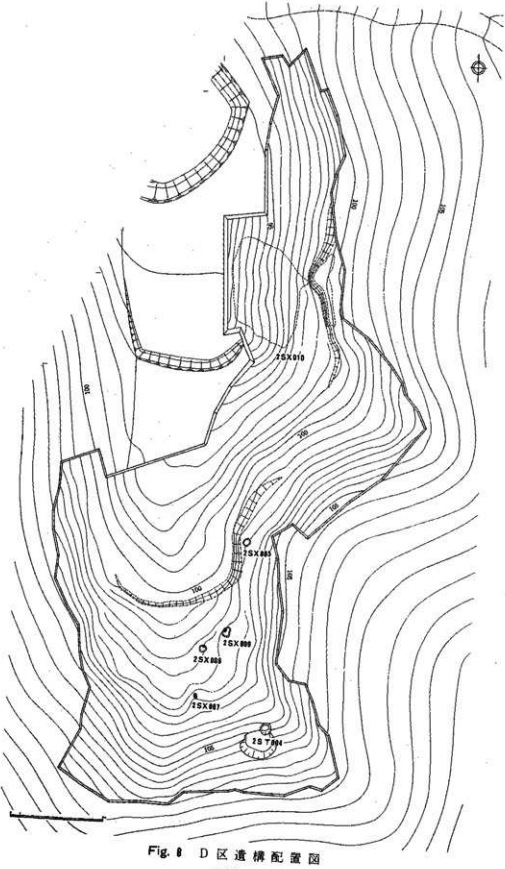


Fig. 8　D区遺構配置図

墳墓１基を検出したほか、調査区北寄りの斜面に河原石の散乱する部分を見い出した（Fig. 8 Pla. 2）。以下順を追って報告したい。

１．遺　構

焼土壙

2SX005（Fig. 9　Pla. 11）

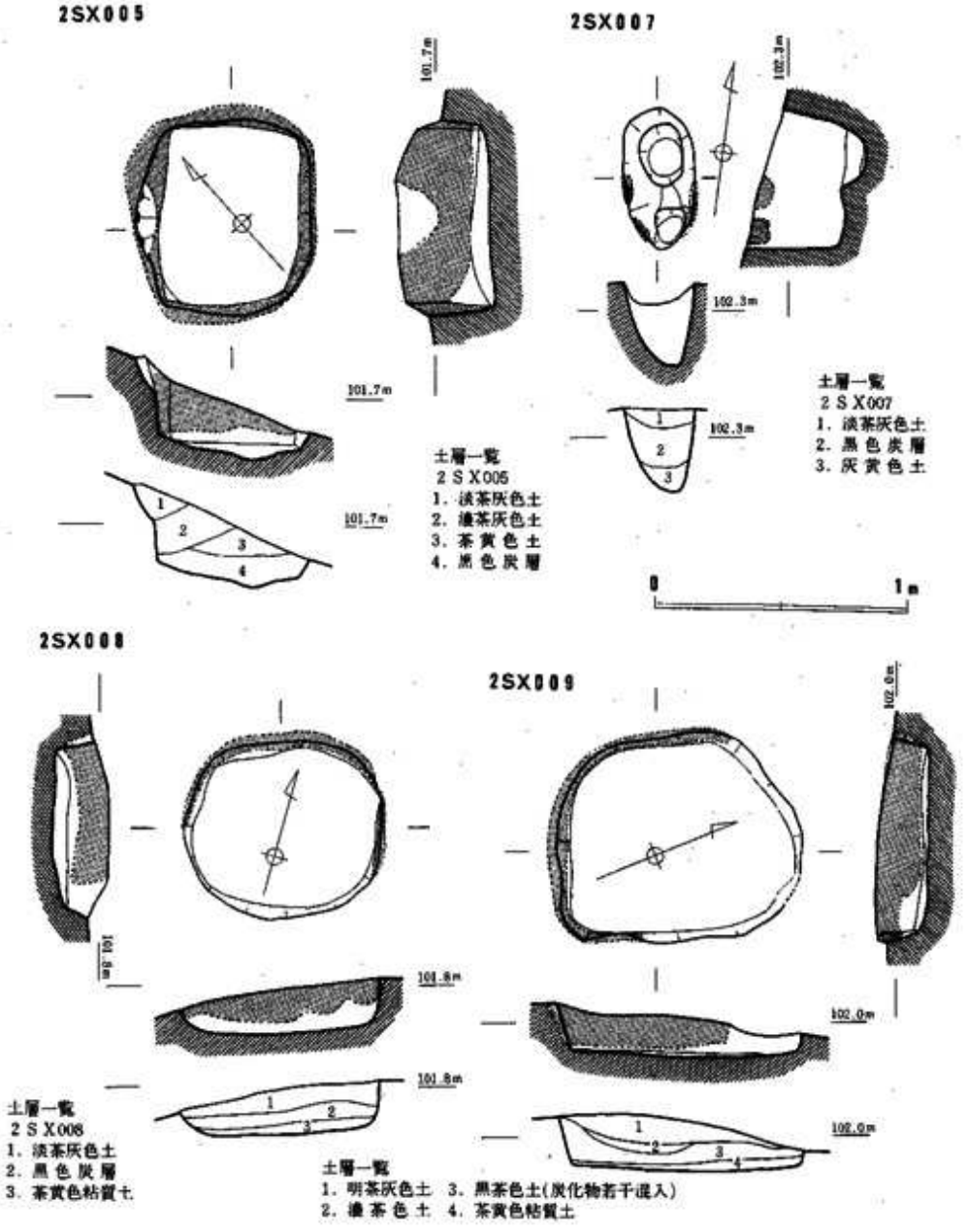


Fig. 9　D区検出焼土壙実測図

長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.4m内外の隅丸長方形を呈し、長軸は傾斜に直行する。埋土は床面上に炭化物を多量に含む黒色炭層が堆積し、それより上位の埋土と大きく異なっている。壁面は黄褐色に変化するほどよく焼けている。

2SX007 (Fig. 9 Pla. 11)

やや急な斜面に位置する。長軸0.55m、短軸0.3m、深さ0.4mの楕円形を呈しており、他の例と比べ深さが幅に対してやや深く、平面積は他の例よりはるかに小さい。埋土は床面上にやや軟質の灰黄色土がみられ、その上に黒色炭層が厚く堆積している。焼壁が遺構上端に若干遺存している。

2SX008 (Fig. 9 Pla. 12)

長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mの不整隅丸長方形を呈している。埋土の堆積状況は2SX008の状況とほぼ同様である。焼壁はほぼ全面に認められるが、床面にはない。

2SX009 (Fig. 9 Pla. 12)

長軸0.95m、短軸0.8m、深さ0.2m内外の不整円形状を呈する。埋土は下半に黒色炭層の堆積を認める。焼壁はほぼ西半分に遺存している。

墳墓（土葬墓）

2ST004 (Fig. 10 Pla. 8, 9, 10)

ほぼ北向きの斜面の中位を掘り下げて段状に造成し、積土をし直したのちその中央にあらためて墓壙を穿つといった特異な構造を呈するものである。以下、墳墓造営の行程順にしたがって報告を進めてゆきたい。

南北3.2m、東西3.9mの不整楕円形を呈する造成範囲を設定し、最も深いところで約0.8m掘り込んでいる。造成によって形成された平坦面は南北2.4m、東西2.5m程度であり、緩やかに北に向かって傾斜している。この平坦面形成後、茶白色砂質土・淡茶色土・暗黄茶色土・暗茶色土等の土を用いて約0.5mの高さに積み直している。この積み土の状況は先述したように数層に分層されるものの、版築状を呈するものではなく単に埋め直し、整形した程度である。その上面は平坦に造られるが、やや北に向かって傾斜している。

墳墓としての主体部は積土上面の平坦部から掘り込まれており、墓壙は南北1.03m、東西0.85m、深さ約0.5mを測る。埋土の状況は上部から陥没したことを物語るような堆積であり人為的なものとは考え難い。また木棺を使用した形跡も観察されなかった。墓壙上面には拳大から人頭大程度の石が集積されており、検出段階では南半分に存在しなかったものの少なくとも墓壙上面には当初は存在していたものであろう。この石群も墓壙中央に向かってわずかではあるが傾斜しており、先の土層観察と併せて墓壙中央部付近で陥没があったことを物語るものと考えている。

集石のある土層は茶灰色土で他と異なるため墳墓上面に盛り土が施されていた可能性も考えておく必要があろう。

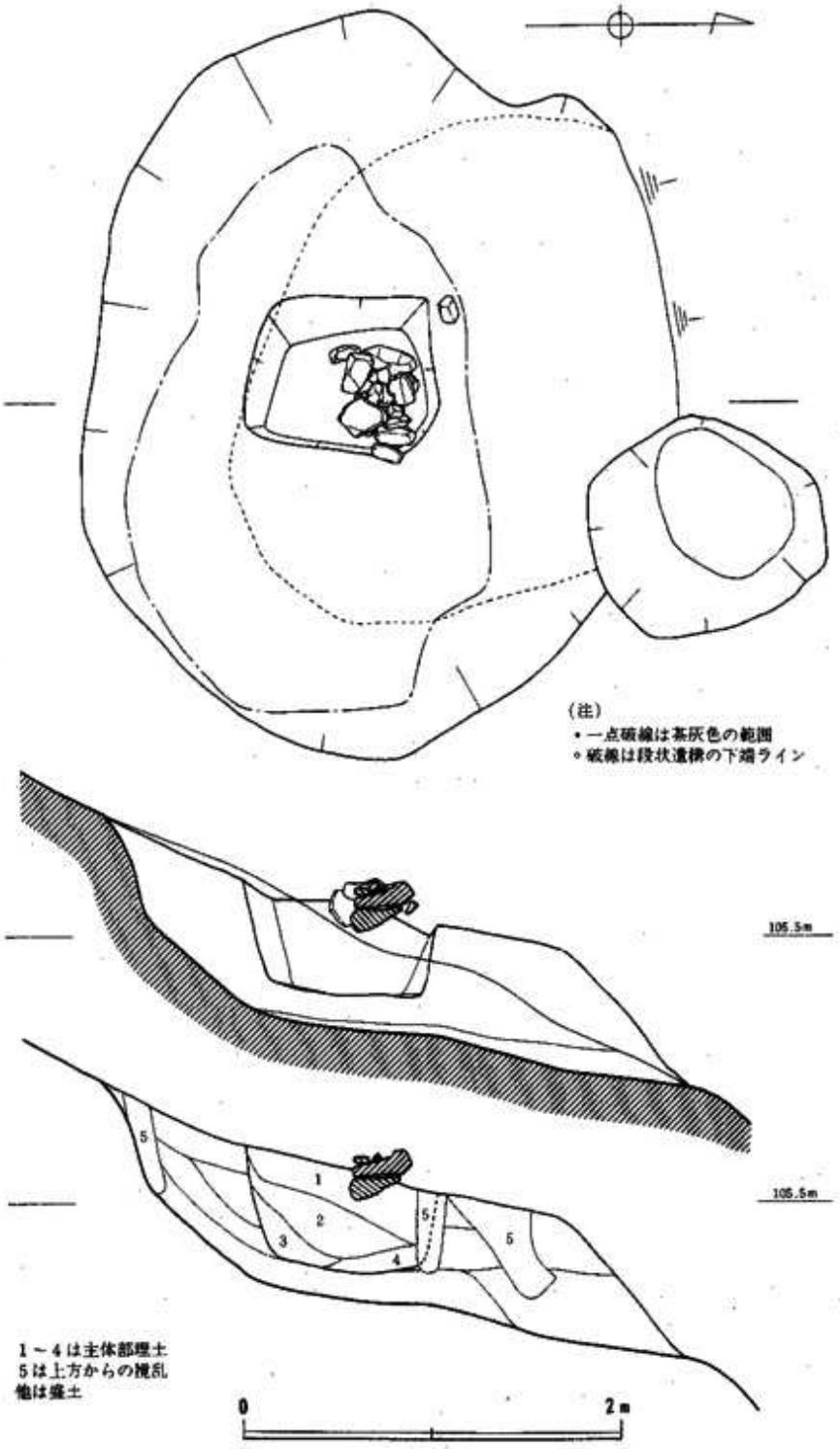


Fig. 10　2ST004 実　測　図

崩落石群

2SX010（Fig. 8　Pla. 10）

斜面中に大量の崩落したとみられる人頭大から拳大程度の礫石群を検出した。礫石中には若干の遺物を含んでおり、当初は何らかの遺構を形成していたものと考えられる。

2．出土遺物

2ST004上面出土土器（Fig. 11）

土師器

小皿a（1・2）　口径7.0cm、7.4cm、器高0.9cm、1.2cmを測る。両者とも底部は糸切りで、板状圧痕を認める。

この他に、土師器椀片や白磁片を検出した。また、2ST004主体部埋土中からは龍泉窯系青磁皿Ⅰ類の小片を検出している。

2SX010出土遺物（Fig. 11　Pla. 23）

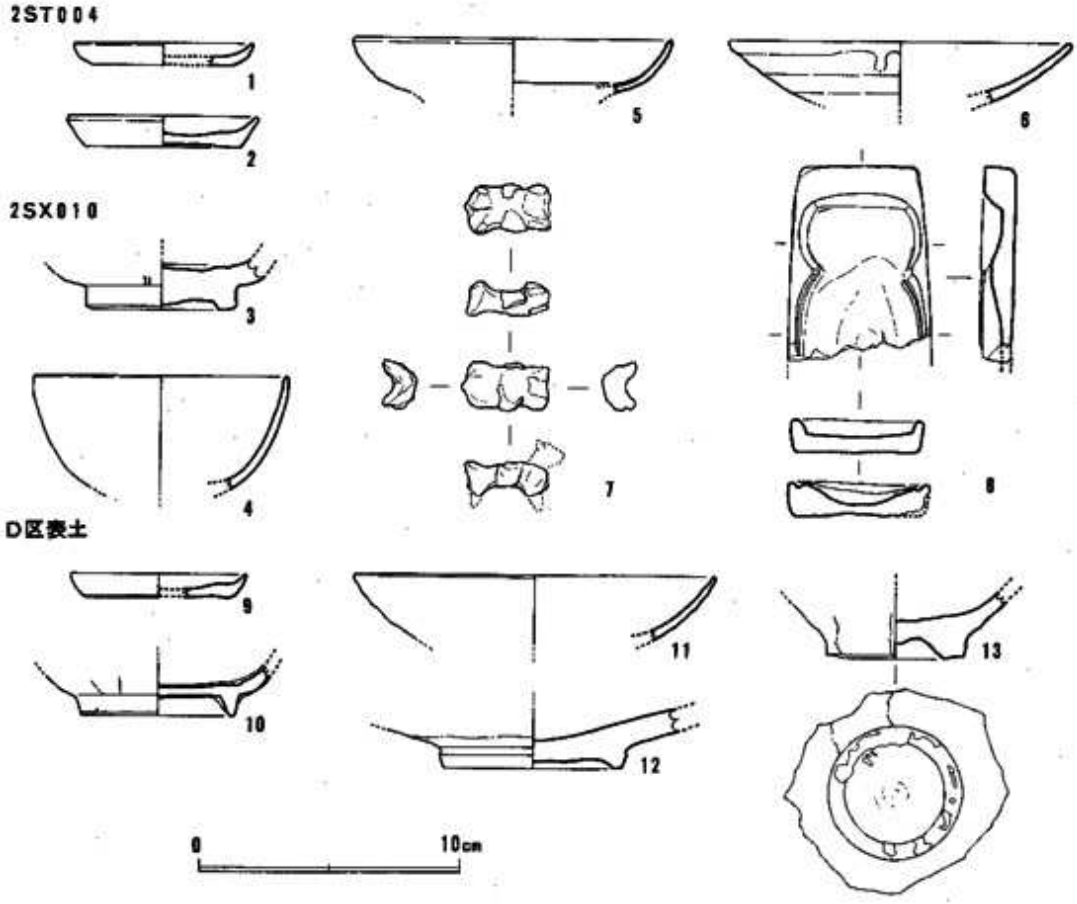


Fig. 11　D区出土遺物実測図

龍泉窯系青磁

椀（3）　Ⅰ－5類。崩落石群中から出土した。

白　磁

椀（4）　口径9.8cmに復原される。近世のものとみられる。崩落石群表土出土。

青　花

皿（5）　見込みに二重圏文を配す。口径12.3cm。崩落石群中出土。

陶　器

皿（6）　口径13.2cm。内面から外面の口縁部にかけては淡緑白色に発色する釉をかける。近世の産物とみられる。崩落石群表土出土。

土製品

人　形（7）　頭部及び脚端部を失っているが、犬か馬を象ったものとみられる。近年の類例から犬の可能性が強い。現存長3.2cm、最大幅1.8cm、現存高1.3cm。胴部に別粘土を充てていた形跡があり、当初は背上に子供の乗るタイプであったものと思われる。(山村信榮氏の御教示による)

石製品

硯（8）　岩製の硯で、現存長7.0cm、最大幅5.6cmを測る。陸部が大きくくぼんでおり、使用の跡が窺える。

これらの他に石群中から備前焼とみられる断片や中国製白磁片などを検出しているが、全体をとおして時期的なまとまりを得られるものではなかった。

D区表土出土土器（Fig. 11　Pla. 23）

土師器

小皿a（9）　口径6.8cm、器高0.9cm。底部は糸切りで板状圧痕を認める。

龍泉窯系青磁

杯（10）　Ⅲ－5－b類。

白　磁

皿（11）　口径13.8cm。若干青味を帯びた釉を全面に施す。近世のものか。

小壺（Pla. 23－a）　取手付きの小壺で外面全体に陽刻の草花文（スタンプ）を配している。暗白色に発色する釉を外面にかけ、内面は露胎。

唐津焼

鉢（12）　底部外面はヘラ削り。他は乳濁色に発色する釉をかけるが剥離が目立つ。

椀（13）　高台径5.0cm。内面にかかる釉は暗緑色を呈している。畳付けに目跡が観察される。

E　区

主丘から北へ張り出す支丘上に位置し、支丘先端の頂部に2ST011、014、そこからやや東へ

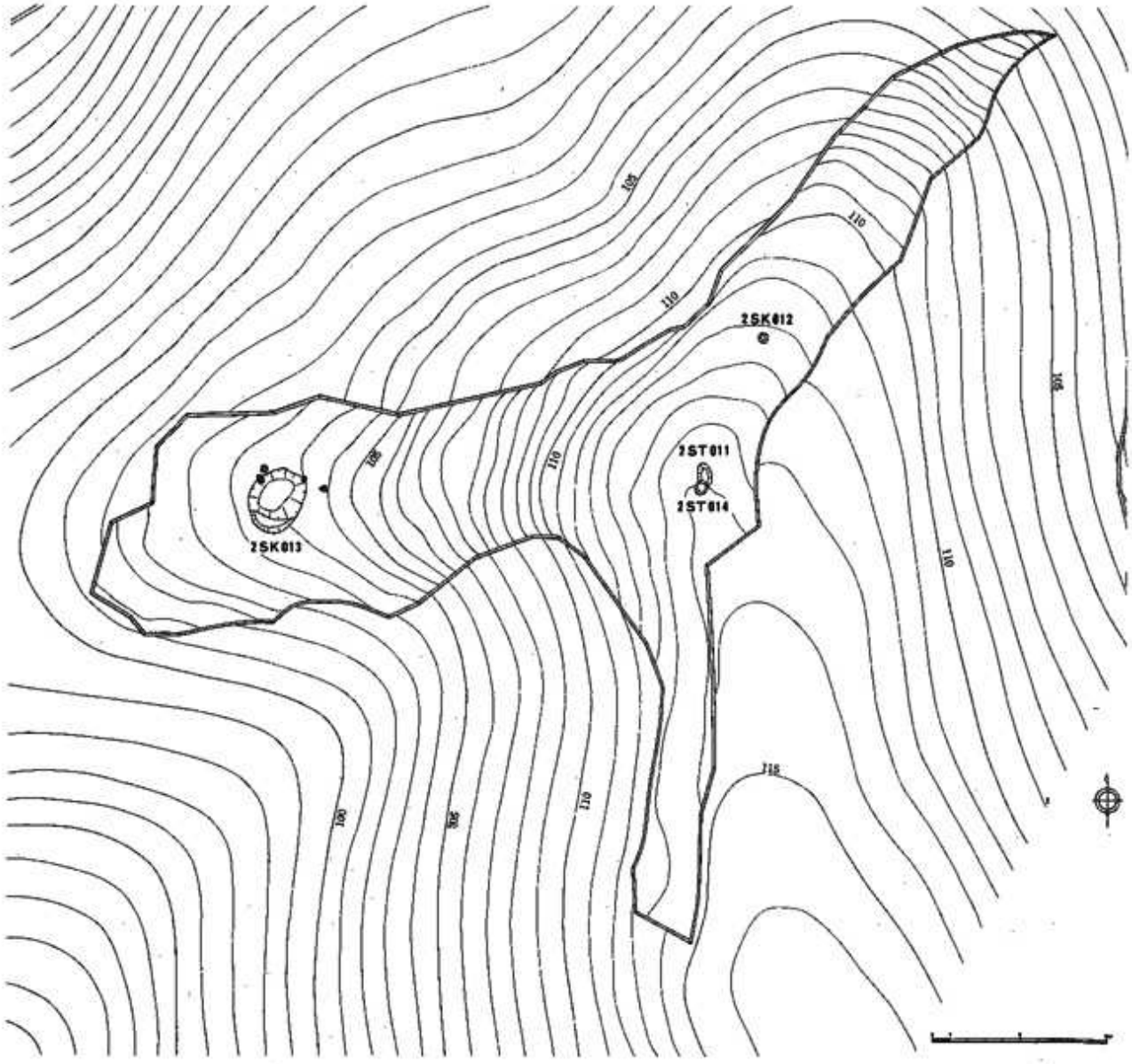


Fig. 12　E 区 遺 構 配 置 図

下ったところに2SK012、西へ下ったところに2SK013がある。(Fig. 11　Pla. 2)

1．遺　構

火葬墓

2ST011 (Fig. 13　Pla. 13, 14)

墓の標識として主体上面に配石をする火葬墓と考えている。

主体となる墓壙は長軸1.1m、短軸1.1m、深さ0.3m内外で、長軸をほぼ南北にとる不整長円形を呈している。埋土は床面上に炭を混入する暗茶白色土が薄く堆積し、その上に茶白色土が被

さっている。茶白色土は上面の石材と共に陥没した土である。墓壙上面には上下二段に石を置いており、下層のものは0.3～0.4mでやや大きめの石を二枚用いて蓋を想定させるような配置である。これに対して上層のものは人頭大程度の石を数個用いて下層の石上を囲むかのように配置されている。

2ST014 (Fig. 13 Pla. 13, 14)

2ST011を切る小ピットであるが、火葬墓として捉えておきたい。

長軸0.6m、短軸0.55m、深さ0.3m内外の不整円形を呈するもので、埋土の状況は下半に炭を

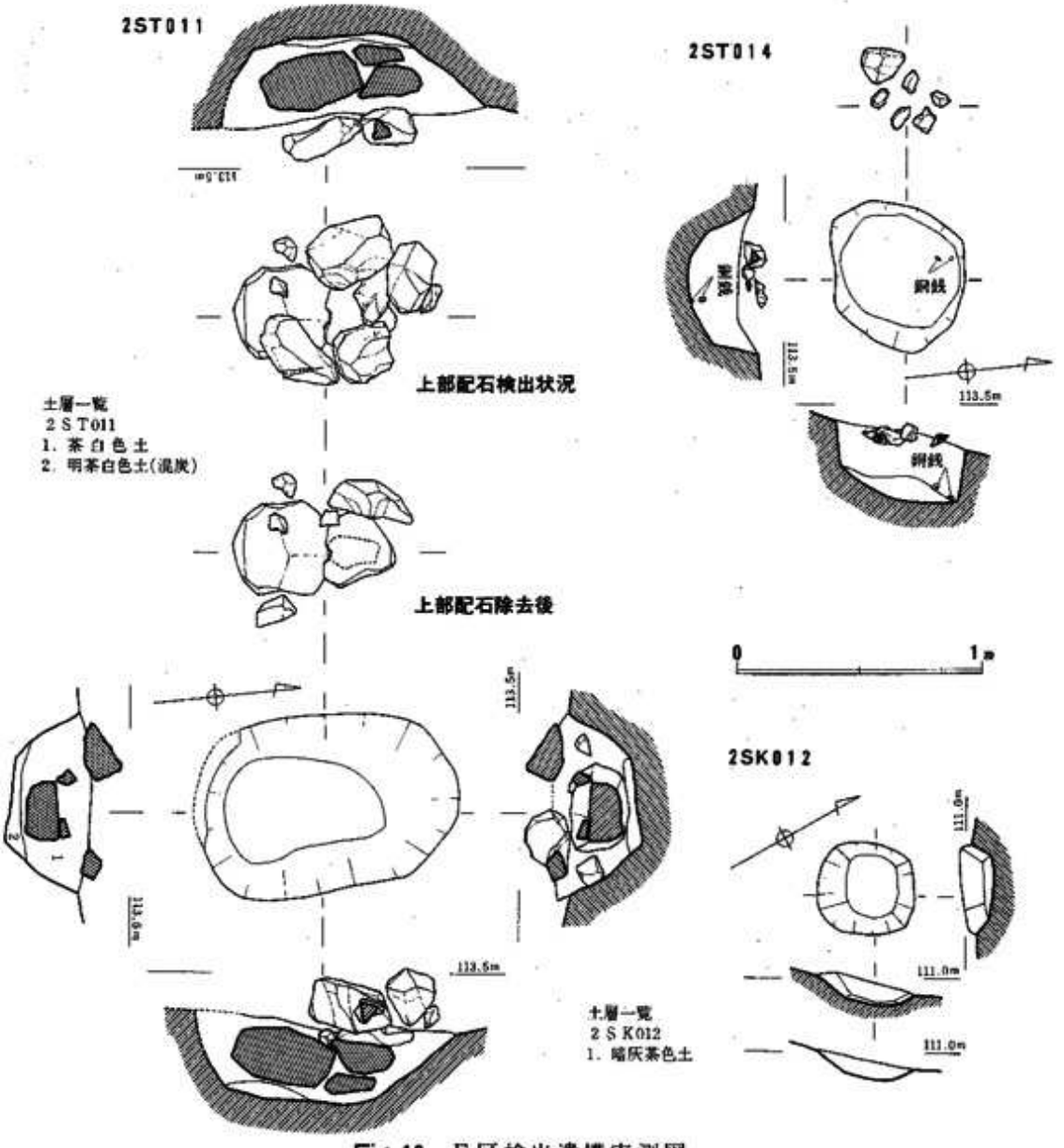


Fig. 13 E区検出遺構実測図

多く含む層があり、その上部に小礫を若干含んだ層が認められる。下層中から銅銭３枚を検出したが、その出土状況は炭層と同時に投入されたような形跡を示しており、特別に配置したような状況ではなかった。上層の小礫は標石またはその根石であった可能性も考えられる。

土　壙

2SK012（Fig. 13　Pla. 15）

長軸0.4m、短軸0.35m、深さ0.1m内外で隅丸方形を呈する小土壙である。埋土は若干の焼土塊や炭を含む暗灰茶色土の単一層である。

2SK013（Fig. 14　Pla. 15）

長軸3.8m、短軸2.8m、深さは最大で0.7m程度の不整形な土壙状遺構である。断面形は盆状を呈し、南西側に低い段を作る。埋土は下層が地山の流入土を主とするが、中位以上に炭化物を含んだ黒色土及び灰色土を認める。焼土の検出はなかった。この遺構の性格については不詳である。

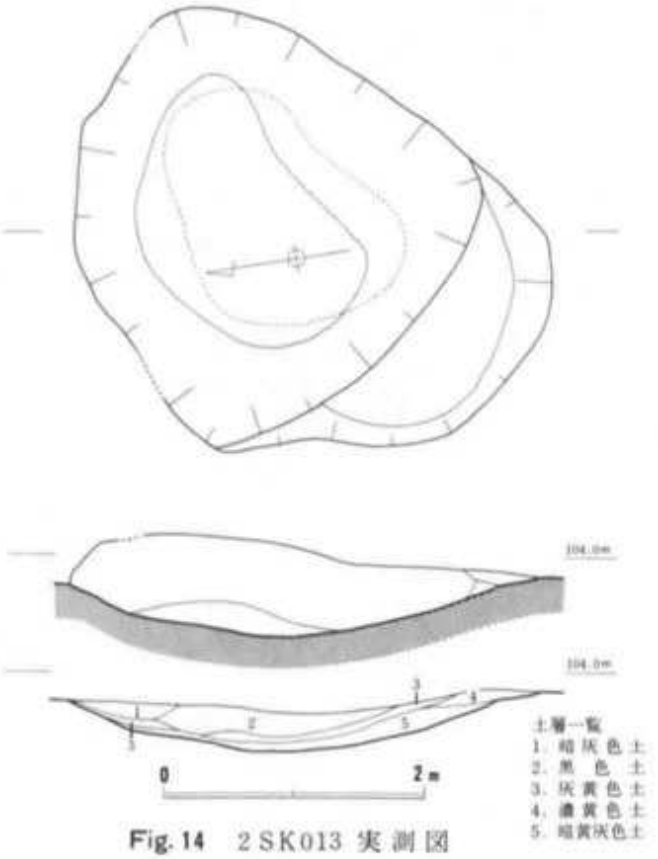


Fig. 14　２SK013 実測図

２．出土遺物

2ST014出土遺物（Fig. 15）

銅銭（１～３）　１は元祐通宝、２は紹興元宝、３は□祐通宝である。

Ｅ区表土出土土器（Fig. 22）

土師器

小皿ａ（１～３）

１は口径7.4cm、器高1.3cm、２は口径8.5cm、器高1.0cm、３は口径8.6cm、器高1.1cmである。すべて底部は糸切りされ、板状圧痕が観察される。

Fig. 15　２ST014 出土銅銭

この他表土中からは若干の遺物が検出されたが、遺構中からは先の銅銭以外に検出された資料はない。

Ⅰ　区

ほぼ北向きの谷奥部で斜面中の一点に調査区を設定できた。調査の結果、焼土壙3基を検出した。(Fig. 16 Pla. 3)

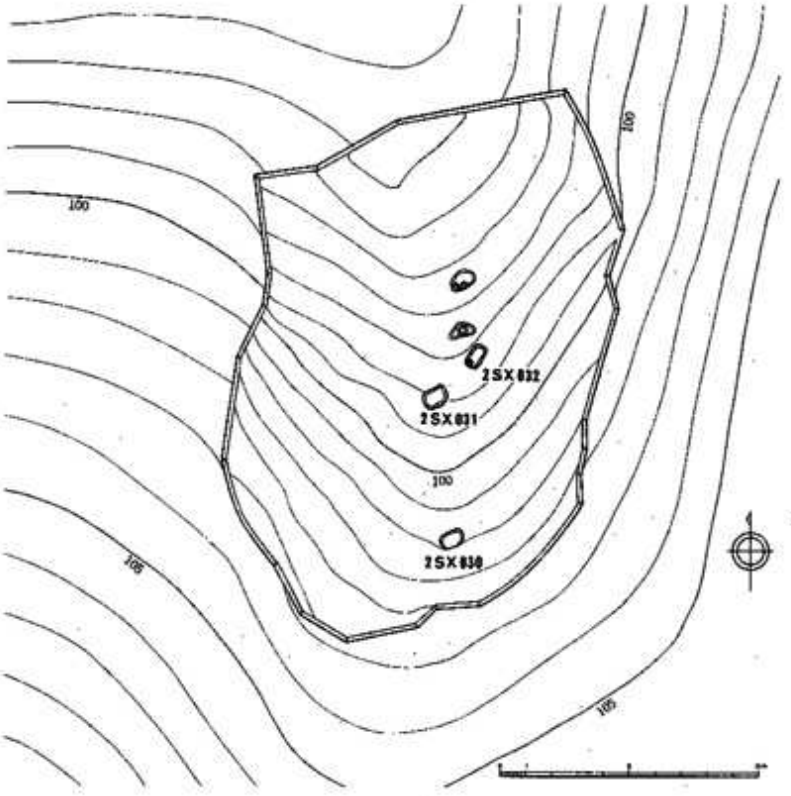


Fig. 16　Ⅰ区遺構配置図

1．遺　構

焼土壙

2SX030 (Fig. 17 Pla. 21)

長軸0.9m、短軸0.55m、深さ0.2mの隅丸長方形を呈する。長軸は等高線にほぼ直行する。埋土は焼土粒を含む暗黒茶色土の単一層である。土壙の壁面は全体にわたって焼けており、黄褐色を呈している。

2SX031 (Fig. 17　Pla. 22)

長軸0.85m、短軸0.6m、深さ0.15mの若干歪んだ隅丸長方形を呈する。埋土、壁面、床面の状況は2 SX 030と同様である。

2SX032 (Fig. 17　Pla. 22)

長軸0.9m、短軸0.65m、深さ0.15の隅丸長方形を呈する。埋土の堆積は、炭化物を含む暗黒色土の下層と焼土粒を含む暗黒茶色土の上層とからなる。壁面はよく焼けており黄褐色を呈し、部分的にではあるが床面にまで及んでいる。

2．出土遺物 (Fig. 22)

Ⅰ区表土出土土器

土師器

小皿a（4）　口径7.4cm、器高1.1cm。底部は糸切りで板状圧痕を認める。

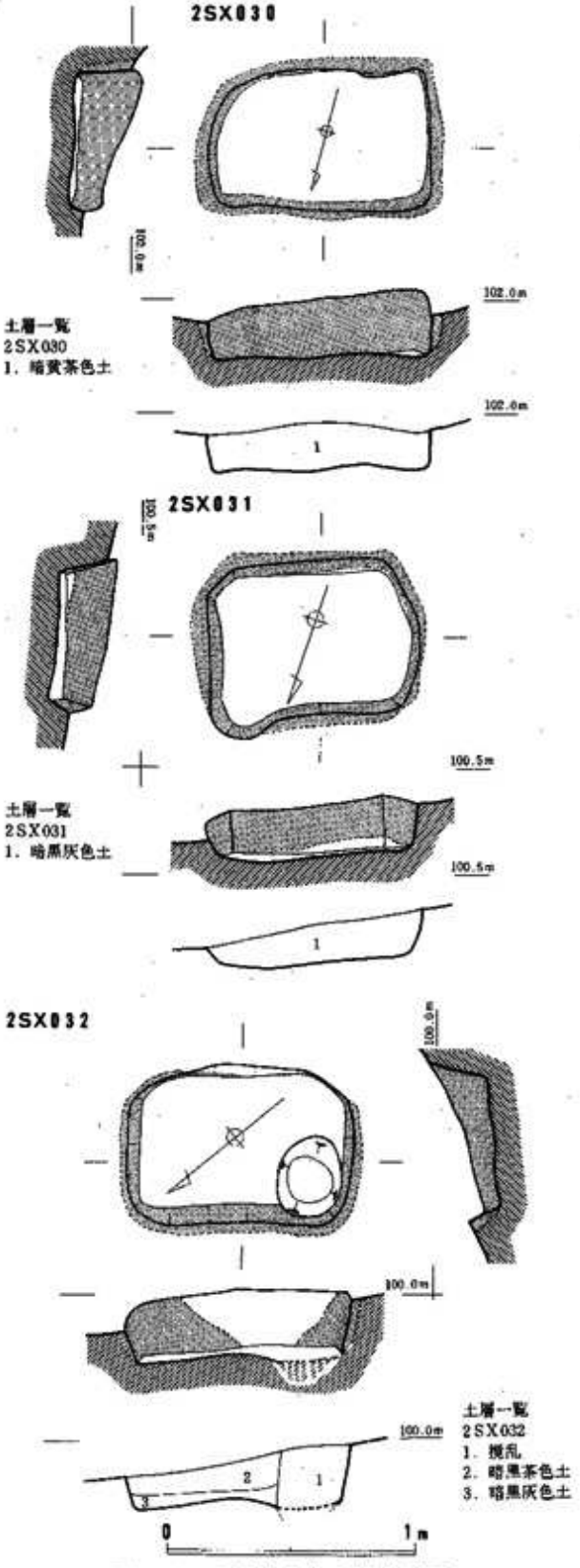


Fig. 17　Ⅰ区検出焼土壙実測図

K　区

南北に延びる主丘陵から西に延びる支丘陵の一部に調査区を設定した。調査の結果、焼土壙10基を検出した。（Fig. 18　Pla. 3，4）

1．遺　構

焼土壙

2SX018（Fig. 19　Pla. 16）

長軸0.9m、短軸0.75m、深さ0.3mを測る隅丸長方形を呈する。埋土は床面上に炭化物を多く含む層が堆積し、その上に焼土ブロックと炭化物を若干含む濃茶色土と淡茶色土が堆積している。壁面はほぼ全体にわたって焼けているが床面には及んでいない。

2SX019（Fig. 19　Pla. 16）

長軸0.95m、短軸0.65m、深さ0.3m内外の隅丸長方形を呈する。埋土は3層からなるが、大きくは下層の黒色炭層と上層の焼土ブロックを含む層に分けられる。壁面は上部から中位にかけて焼けているが、下半及び床面には及んでいない。

2SX020（Fig. 19　Pla. 17）

長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.3mのやや丸みを帯びた隅丸長方形を呈している。埋土及び壁面の状況は2SX019に近似する。

2SX021（Fig. 19　Pla. 17）

長軸0.95m、短軸0.5m、深さ0.3mのやや歪んだ長方形を呈する。埋土は4層からなり、最下層には黒色炭層が堆積している。

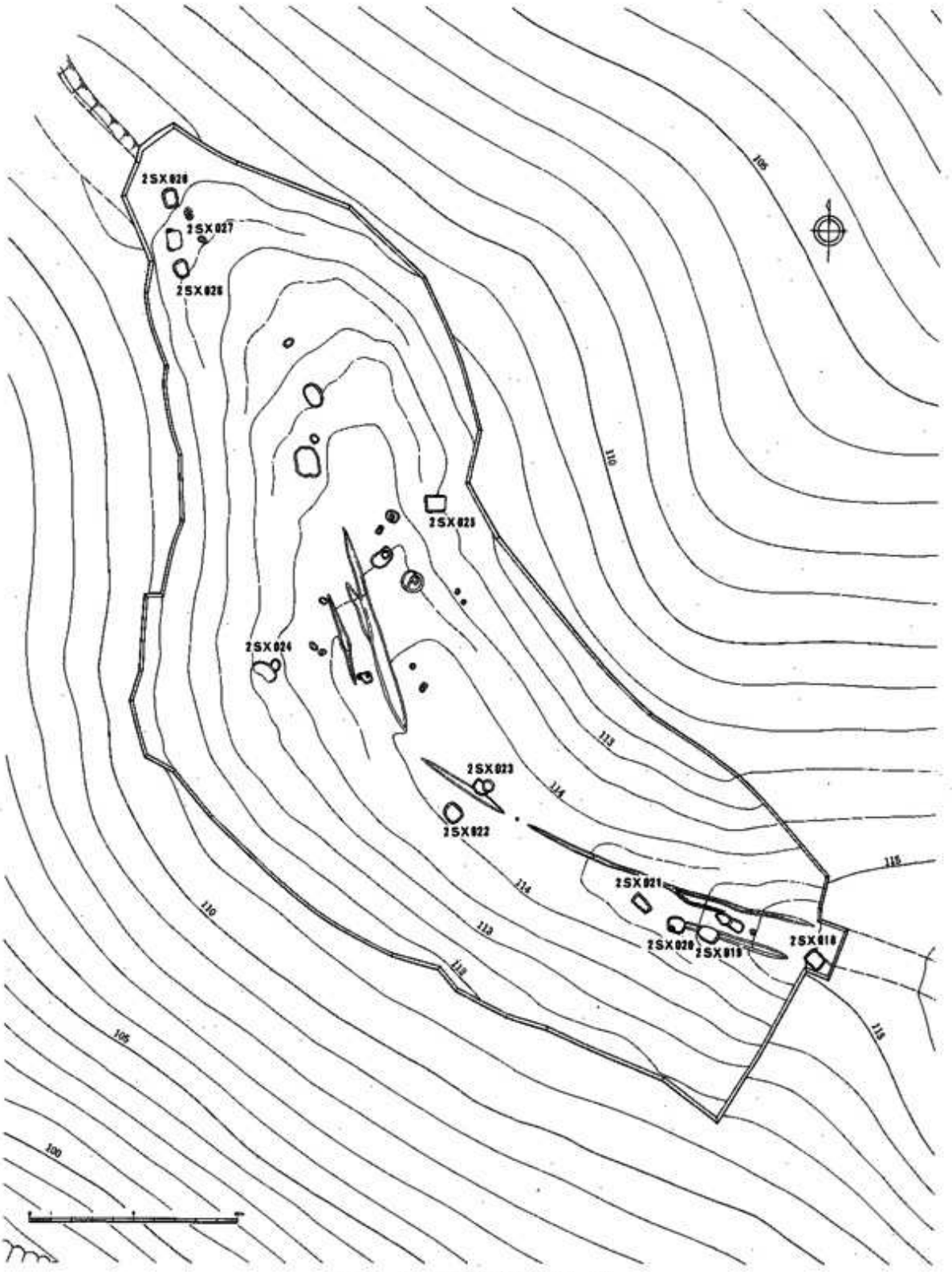


Fig. 18　K 区 遺 構 配 置 図

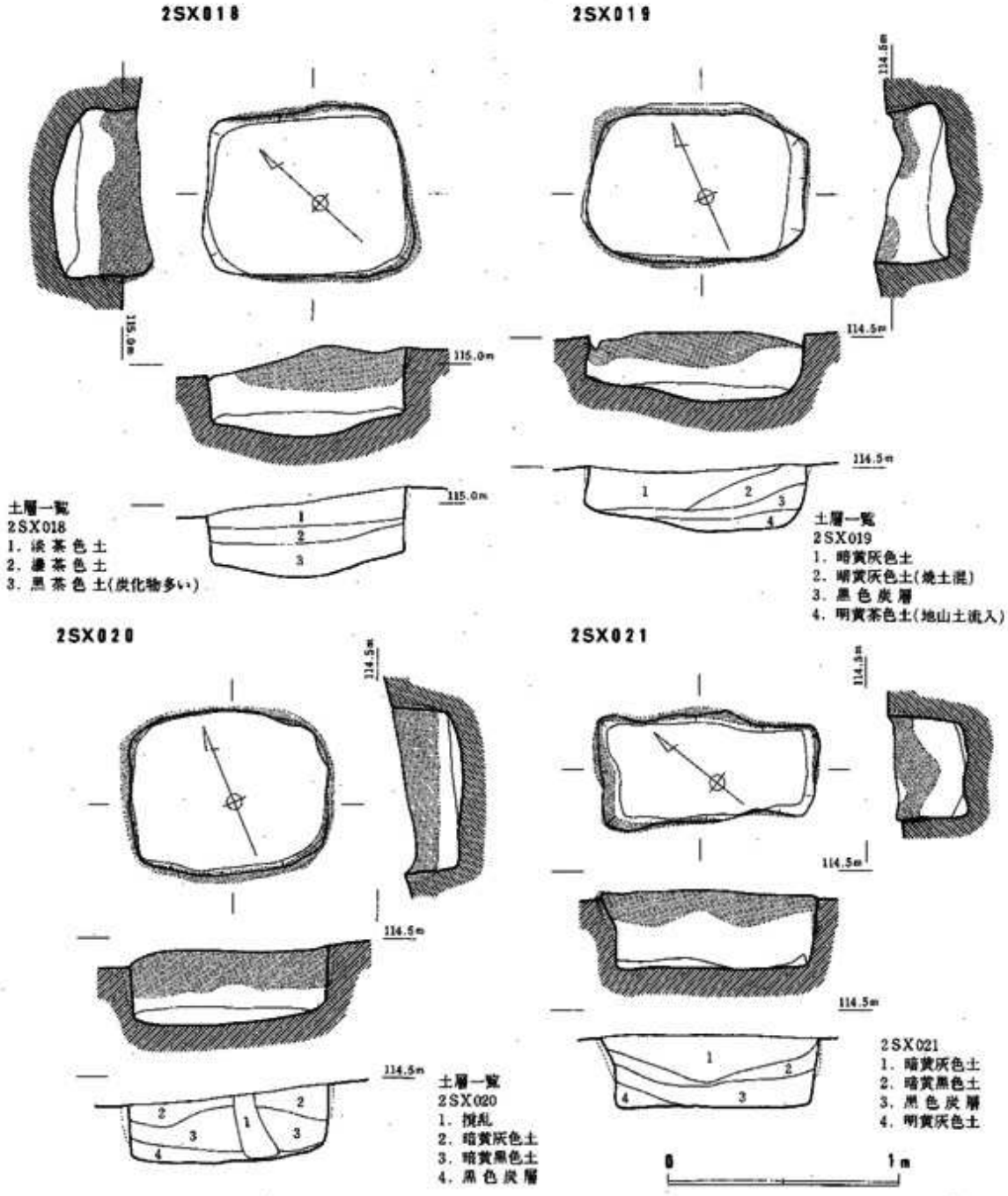


Fig. 19　K区検出焼土壙実測図（Ⅰ）

2SX022 (Fig. 20　Pla. 18)

長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.25m内外の不整円形を呈している。埋土は焼土を含む暗灰黄色土の上に黒色炭層が堆積する。焼壁はほぼ全面にわたって観察された。

2SX023（Fig. 20　Pla. 18）

攪乱により旧形をとどめていないが、長軸0.75m、短軸0.5m、深さ0.15m内外に復原できるものと思われる。形状は不整長円形を呈している。埋土は床面上に焼土ブロックを含む淡黄茶色土が堆積し、その上に黒色炭層が被さる。壁面は東半分に残存しているが、床面にはない。

2SX024（Fig. 20　Pla. 19）

攪乱により旧形をとどめないが、直径0.45m内外の不整円形に復元されるものと考えられる。埋土は、暗茶灰色土の単層で、焼壁は西側部分にのみ残存している。

2SX025（Fig. 21　Pla. 19）

長軸1.0m、短軸0.75m、深さ0.3mを測る。埋土は、床面上に黒色炭層が堆積し、その上に若干の炭化物や焼土粒を含む層が被っている。焼壁はほぼ全面にわたって残存しているが、床面には認められない。

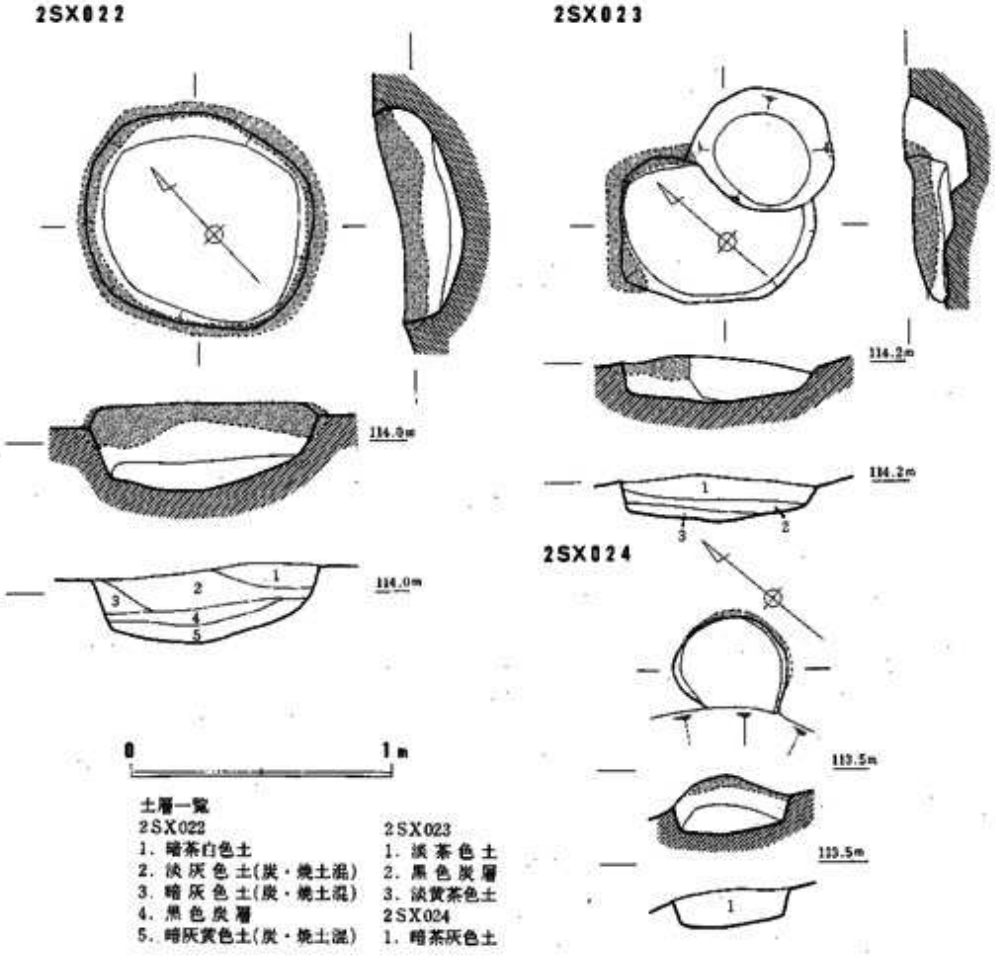


Fig. 20　K区検出焼土壙実測図（Ⅱ）

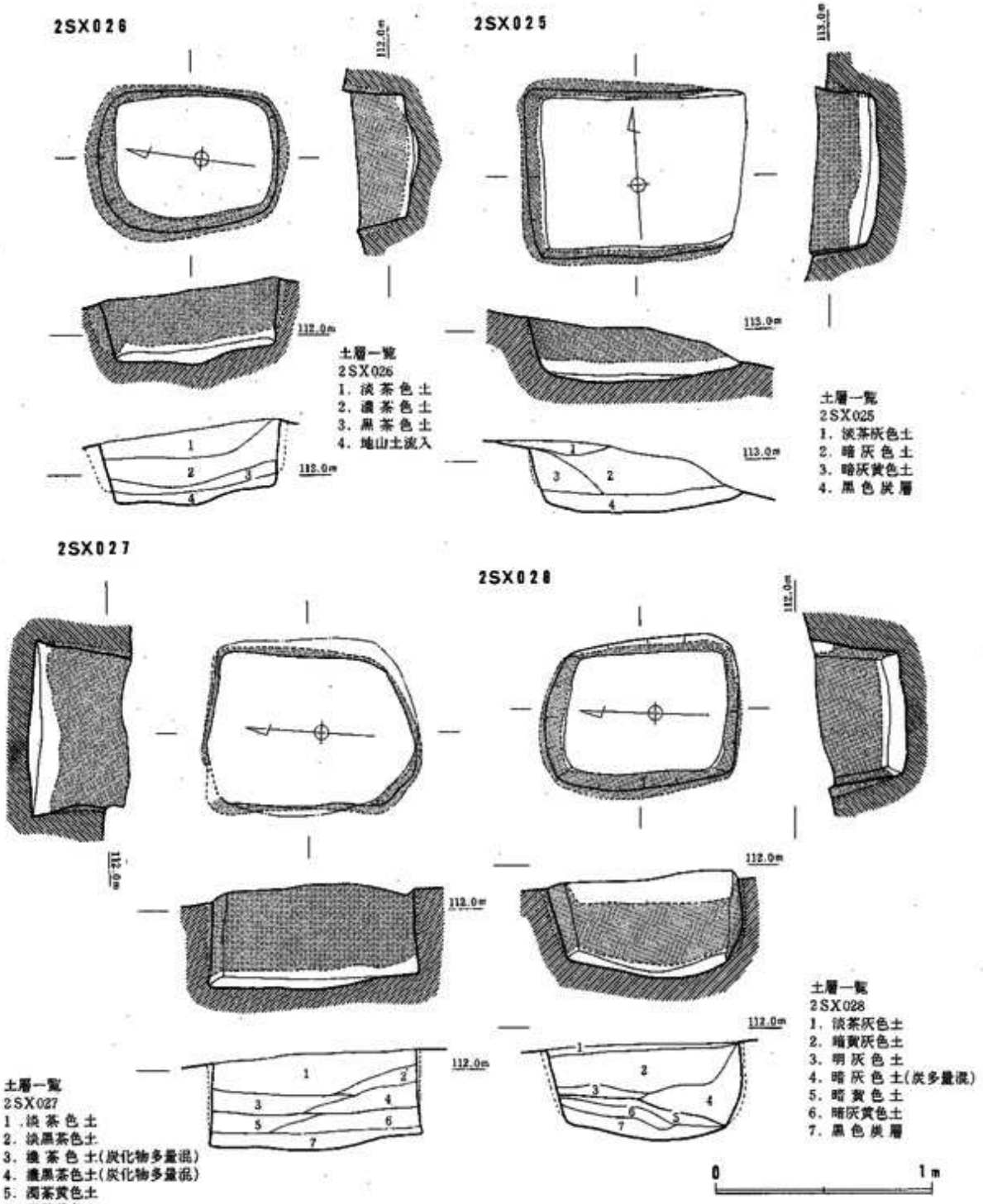


Fig. 21　K区検出焼土壙実測図（III）

2SX026 (Fig. 21　Pla. 20)

長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.3mを測る隅丸長方形を呈する。埋土は4層からなるが大別すると床面上にある焼土ブロック層と、それに被さる炭化物を多量に含む黒茶色土とに分けられる。焼壁はほぼ前面に認められるが、床面にはない。

2SX027 (Fig. 21　Pla. 20)

長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る不整長円形を呈する。埋土は7層に細分されるが、床面上の黒色炭層とそれに被さる若干の炭化物を含む層の上に、黄色土による床面の再調査が施される。その上部には、下位層と同様の堆積状況が認められる。このことから、この遺構は2回以上の使用が考えられる。焼壁は全面に残存しているが、床面には認められない。

2SX028 (Fig. 21　Pla. 21)

長軸0.85m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る隅丸長方形を呈する。埋土の堆積状況は、2SX027と同様に下位層と上位層に大別される。これも2回以上の使用を想定することができる。焼壁は全面に残存しているが、床面は焼けていない。

2．出土遺物 (Fig. 22)

土師器

小皿a（5，6）　口径6.7cm、8.6cm、器高1.3cm、0.9cm。底部は糸切りされる。

大皿a（8）　口径24.5cm、器高2.9cmに復原される。底部は糸切りされる。

9は大型容器で鉢などの底部とみられる。体部はヨコナデされるが、粘土帯の痕跡をよく残している。

青　花

椀（7）　口径9.8cm。暗灰色に発色する釉がかかる。

他にこの地区から龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5－b類や白磁皿Ⅸ－1－b類などを検出している。

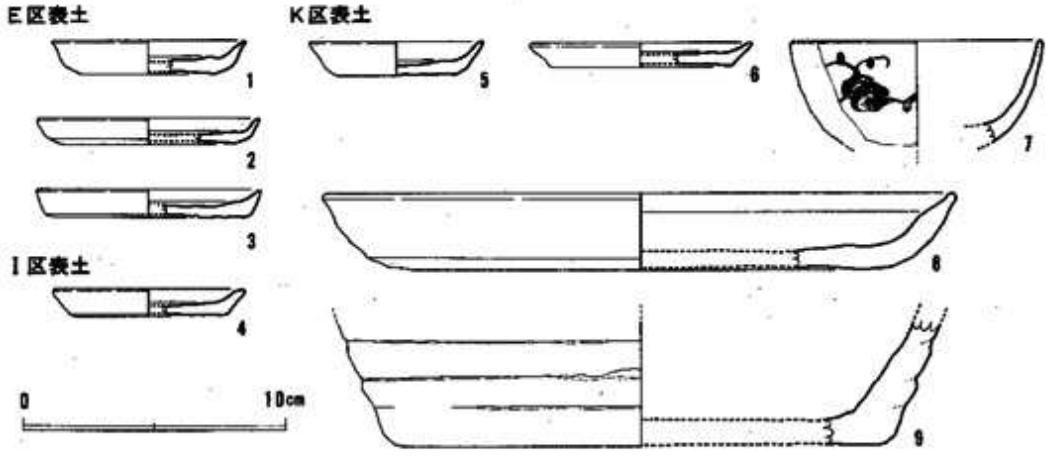


Fig. 22　E・I・K区出土土器実測図

4．調査のまとめ

今回の調査で検出された遺構について個別にまとめることにより、本章の責を果たしたい。

墳　墓

2ST004　遺構の時期は遺物の検出量が少量な上に、すべて小片であることを含めると余り積極的な意見は述べられないが、主体となる墓壙埋土中から龍泉窯系青磁皿片が検出されていることから、12世紀後半以降の造営と考えられる。

この時期以降の墳墓の類例からは、こうした特殊な構築方法を採用しているものは知見にない。時期を限定せずにみてみると奈良県天理市柚之内火葬墓に近いものを求めることができる。ただしこの例は9世紀まで遡るものであり、いま直接的にそれとの関連を求めるわけにはいかない。安楽寺と言う大きな勢力のあった近接地だけに、今後の詳細な検討が必要である。

2ST014　造営の時期を考えることのできる資料は、古銭のみであり具体的な時期を知ることは困難であるためここでは中世の産物であると言うにとどめたい。

遺構の形状に関する近似例は、天満宮の東にある宝満山遺跡に求めることができる。同遺跡第3次調査で検出された3ST001は規模、上部石材の配置、埋納遺物の点で酷似しており共通するものを感じる。太宰府市及びその周辺にはこの2例以外に近似する資料が無いため、詳細については資料の増加を待って検討する必要があろう。

石龕列

2SX003　近似する類例は知見にない。併せて出土遺物もなく時期を決定する要素も欠いている。ただ、検出状況の観察によると所見としてこれらの石龕群は全てが同時期に、且つ一度に造られたものであると考えられ、全体が完結してひとつの意味を成すものと思われる。また、個々の石龕についても各々主体（本尊）となるような石を持っており、この列は個体の集成を意味するものと見なされる。その意味から想像されるものには、金剛界曼荼羅や胎蔵曼荼羅をはじめとする曼荼羅類や四国八十八所に代表されるような観音霊場信仰などが掲げられる。特に四国八十八所観音霊場の信仰は、当地に行かずとも身近な地でそれらにお参りできるようにするために、著名な寺院や神社の裏山に石碑や石仏を必要数配置することで同じ意味をもたせようとした例も知られている（四国八十八所に限らず西国三十三所、坂東三十三所などもある。Fig. 23は奈良県安倍文殊院の境内にある霊場信仰の一例）。こうした霊場信仰は中世末期から近世にかけて発展したものであり、この推定の通りであれば今次の調査で検出した2SX003の造営時期もおおよそは知られるところである。先学諸先生方の御教示を待つところである。

Fig. 23　奈良県安倍文殊院裏山の一例

焼土壙

今次の調査で検出された焼土壙からは、時期を決定できるような資料は見い出せなかった。故に今回は焼土壙の性格について簡単に触れることによってその責を果たしたいと考える。

こうした焼土壙については既に宝満山遺跡の報告において火葬施設であるとほぼ断定的に記述していたが、近似した形状の遺構で性格の異なると思われる遺構も各地で検出されるようになり、遺構の性格の決定にはいま少し検討を加える必要があると思われるため、以下に簡単にまとめておきたい。

今回検出した全ての焼土壙は規模の差こそあれ基本的には同一の形状を呈しており、それは立地の上から火葬を実施した痕跡と考えて良いようである。確実に火葬に伴う施設として捉えられるものに、太宰府市内では篠振遺跡と金光寺跡がある。いずれも火葬された骨片が検出されているためその用途は確実に火葬施設（墓とするものもあったであろう）である。その立地を見ると金光寺例は三昧堂とみられる三間四面の小堂の背後にある丘陵斜面を造成した上、石塔を主体とした墳墓と共に存在している。ただしその各々の位置は明確に区分されている。篠振遺跡では舌状に張り出した尾根の頂上付近にほとんど切り合うことなく配置されていると共に、土葬墓群と火葬施設とは明確にその位置を区分している。この状況から今回検出した焼土壙の多くは太宰府

天満宮（安楽寺跡）にほど近いということも含めて、火葬施設であったものと考えている。

ただし、D区やＩ区で検出した焼土壙についてはその立地が谷の奥部であり、これまで知られている例とは必ずしも同じとは言えない。こうした地点についてこれまで発掘調査の手が余り及んでいなかったと言えばそれまでであるが、火葬施設とは違った用途も考えておかねばならないかも知れない。その一例として掲げられるものに、窯跡付帯の焼土壙がある。詳細については水谷寿克氏の論に詳しいのでここではあまり触れないが、氏は登り窯などの近くに認められる焼土壙については土器焼成の燃料に使用するための木炭窯と結論付けている。太宰府市においても最近窯跡に付帯するとみられる焼土壙が宮ノ本遺跡で検出されており、その規模や形状及び立地はここに報告した焼土壙に近似するものであるとともに、D区では瓦の小片も若干検出されていることから窯跡の存在は確認されていないものの、炭焼き窯である可能性もいくらかは考えておかねばならないのかも知れない。

このように今回検出したような焼土壙は立地や規模、残存状況など単一の遺構のみを捉えると非常に近似しており、その性格を考えるためには考古学的な検討ばかりでなく、残溜脂肪酸分析をはじめとする土壌分析など、化学的な方面からも積極的な検討が必要であるといえる。

（参考文献）

・置田雅昭ほか『奈良県天理市　柚之内火葬墓』（考古学調査研究中間報告７　埋蔵文化財天理教調査団　1983）

・狭川真一・山田富美ほか『宝満山遺跡』（太宰府市の文化財　第12集　太宰府市教育委員会　1989）

・水谷寿克「窯跡付帯の焼土壙について」『京都府埋蔵文化財論集　第１集』（京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987）

・石松好雄ほか『大宰府史跡－昭和62年度発掘調査概報－』（九州歴史資料館　1983）

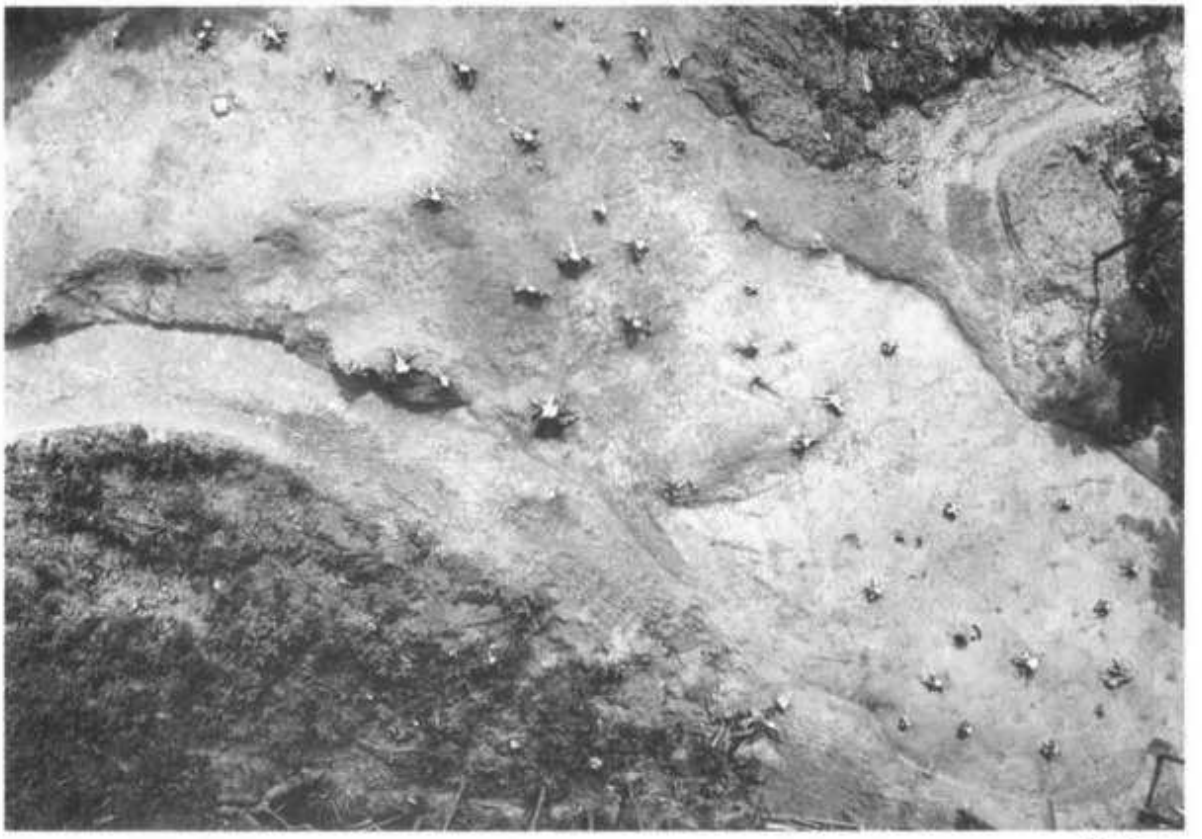
図　　版

A区全景

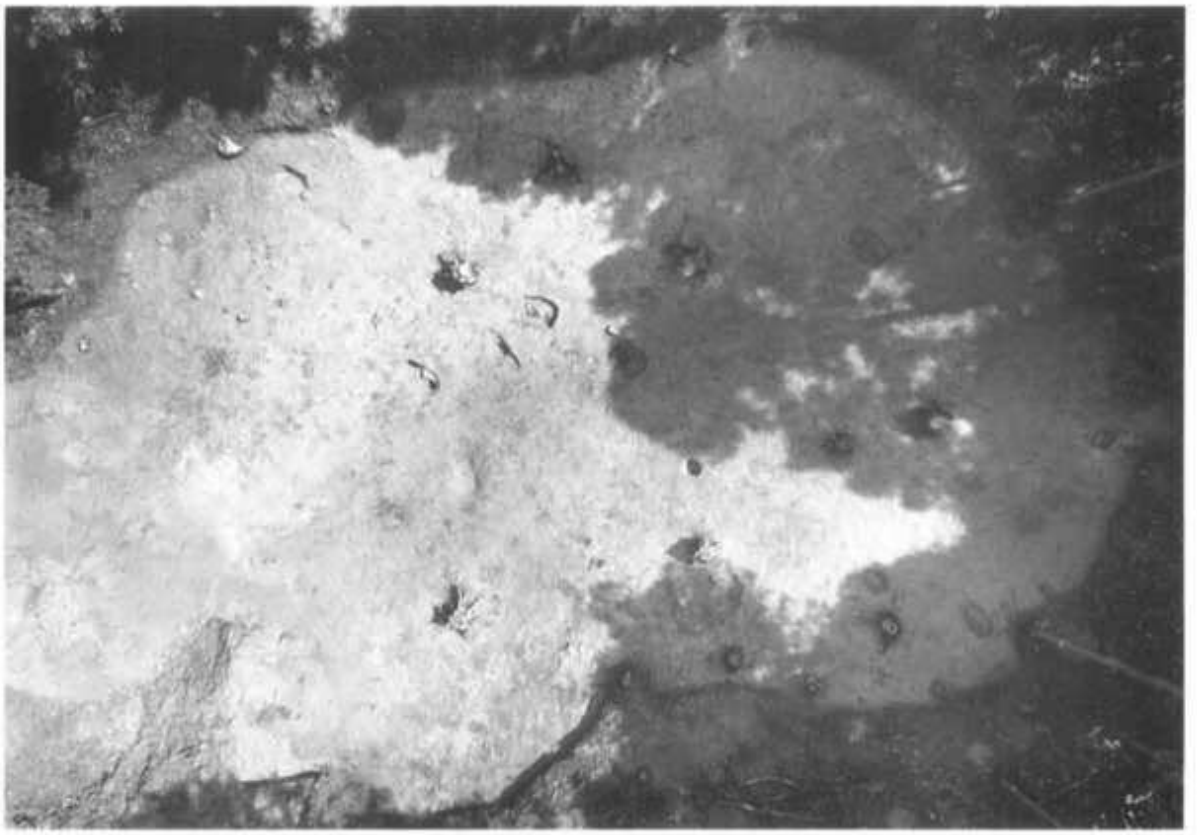
B区全景

Pla. 2

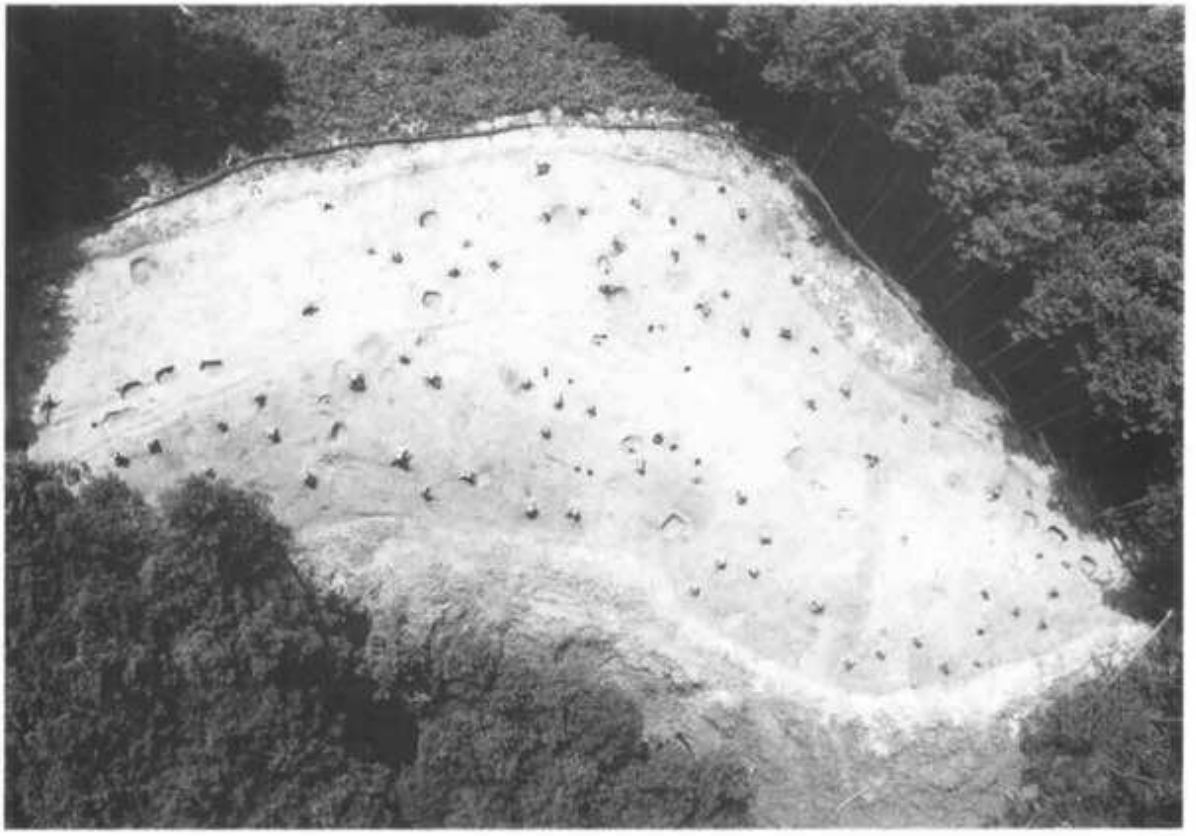
D区全景



E区全景



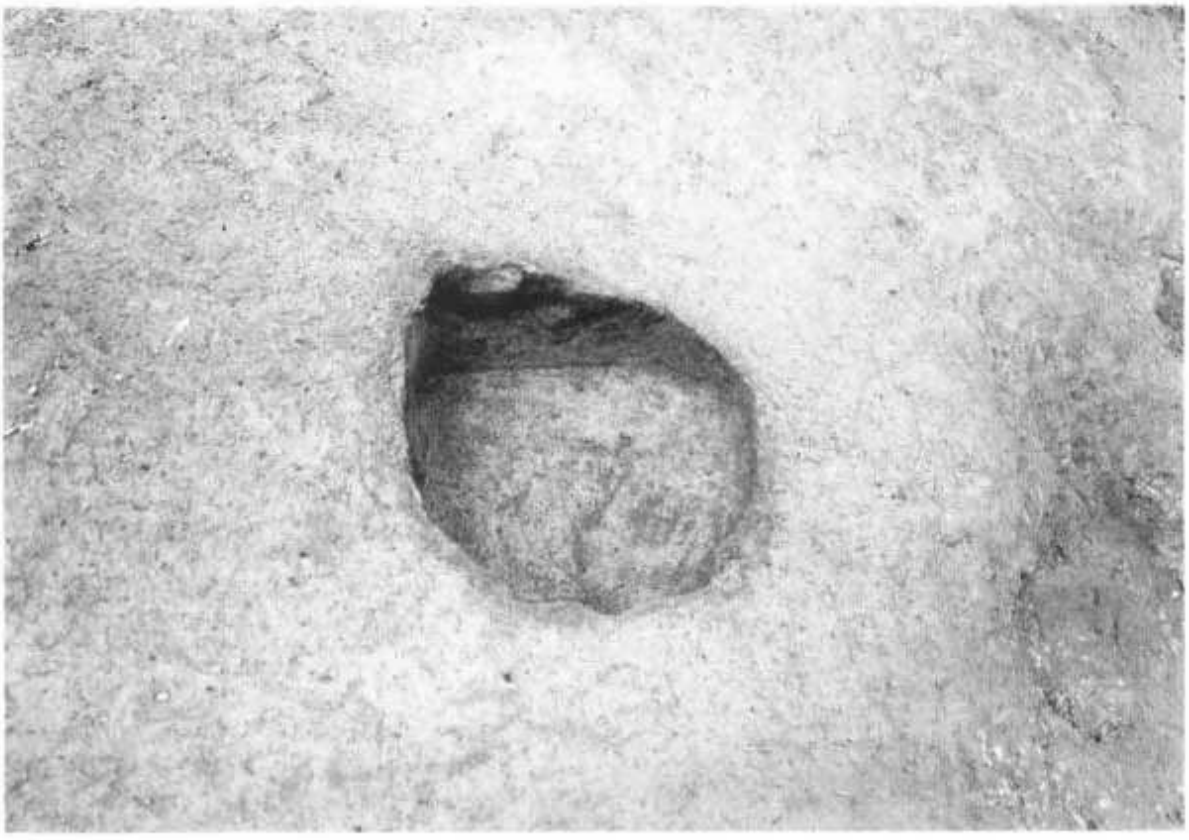
I区全景



K区全景

K区南半部

K区北半部

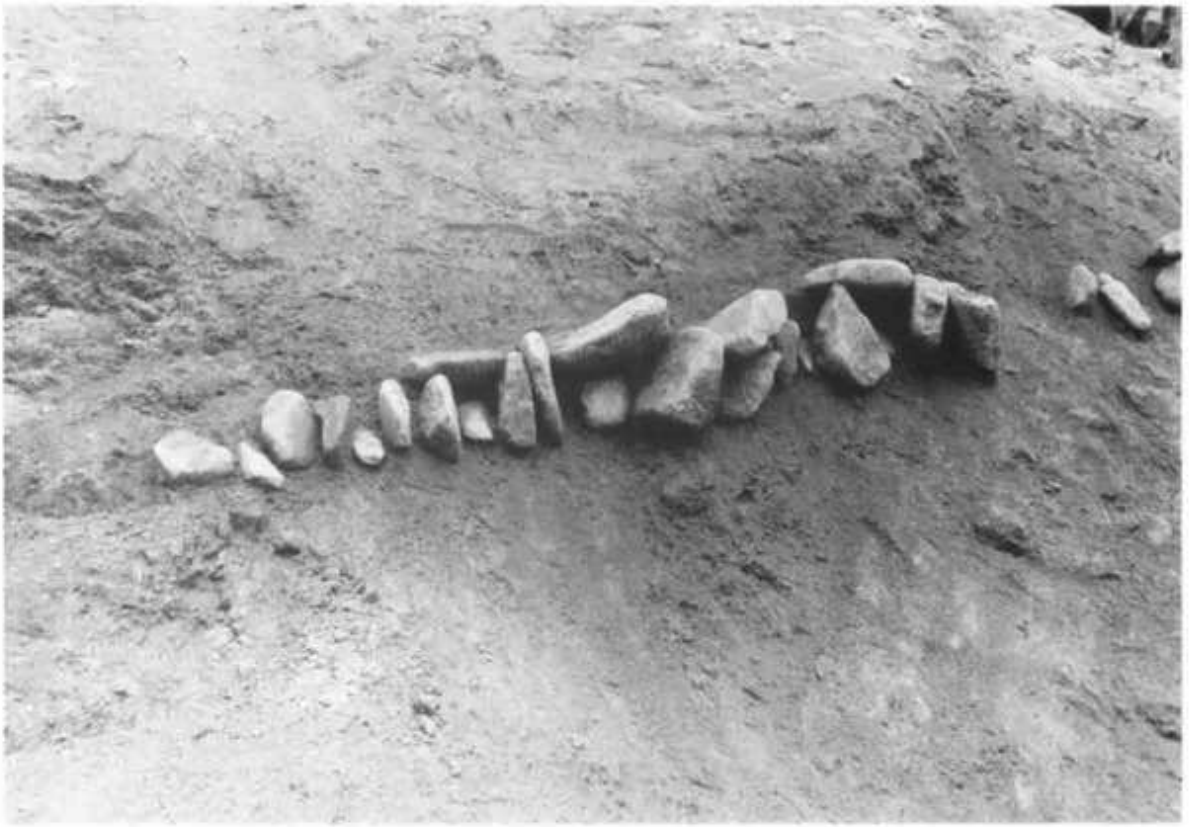


2SX001（東から）

2SX002（東から）

2SX003（上空から）

2SX003

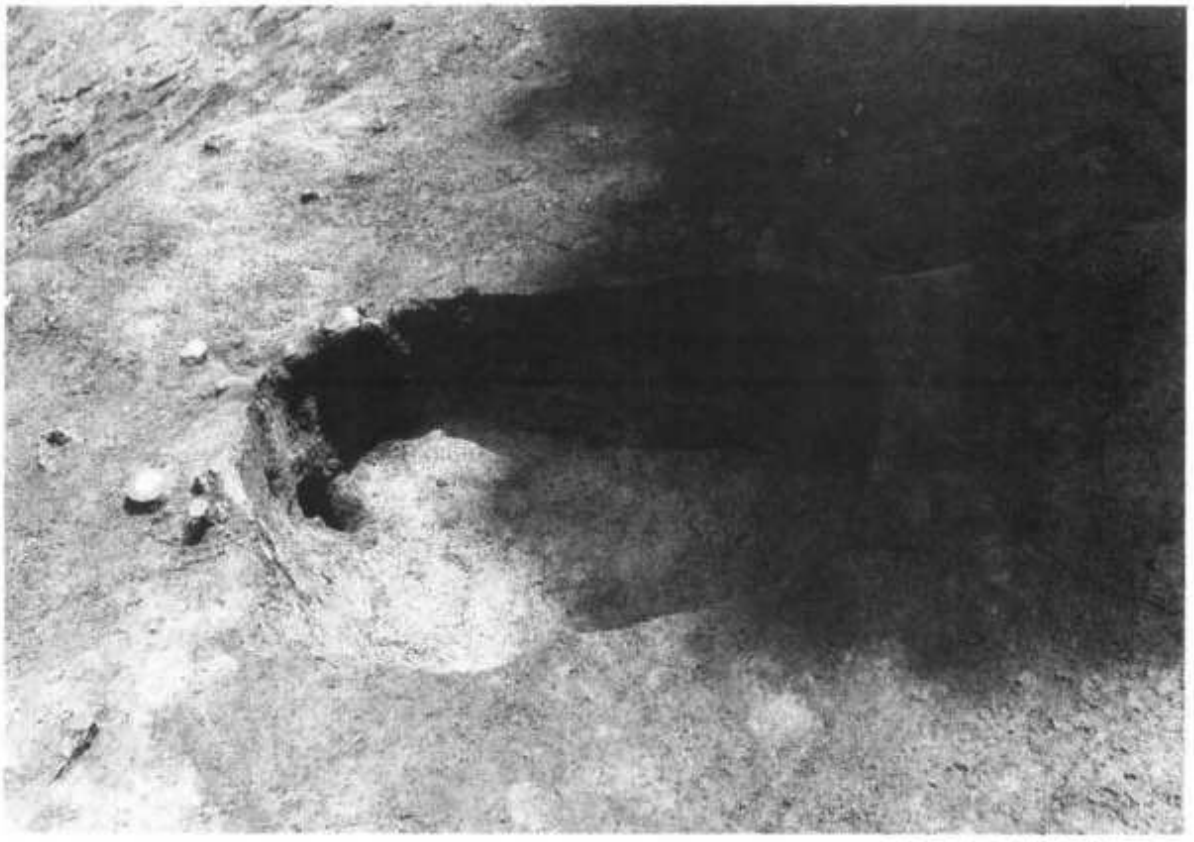


2SX003

2SX003

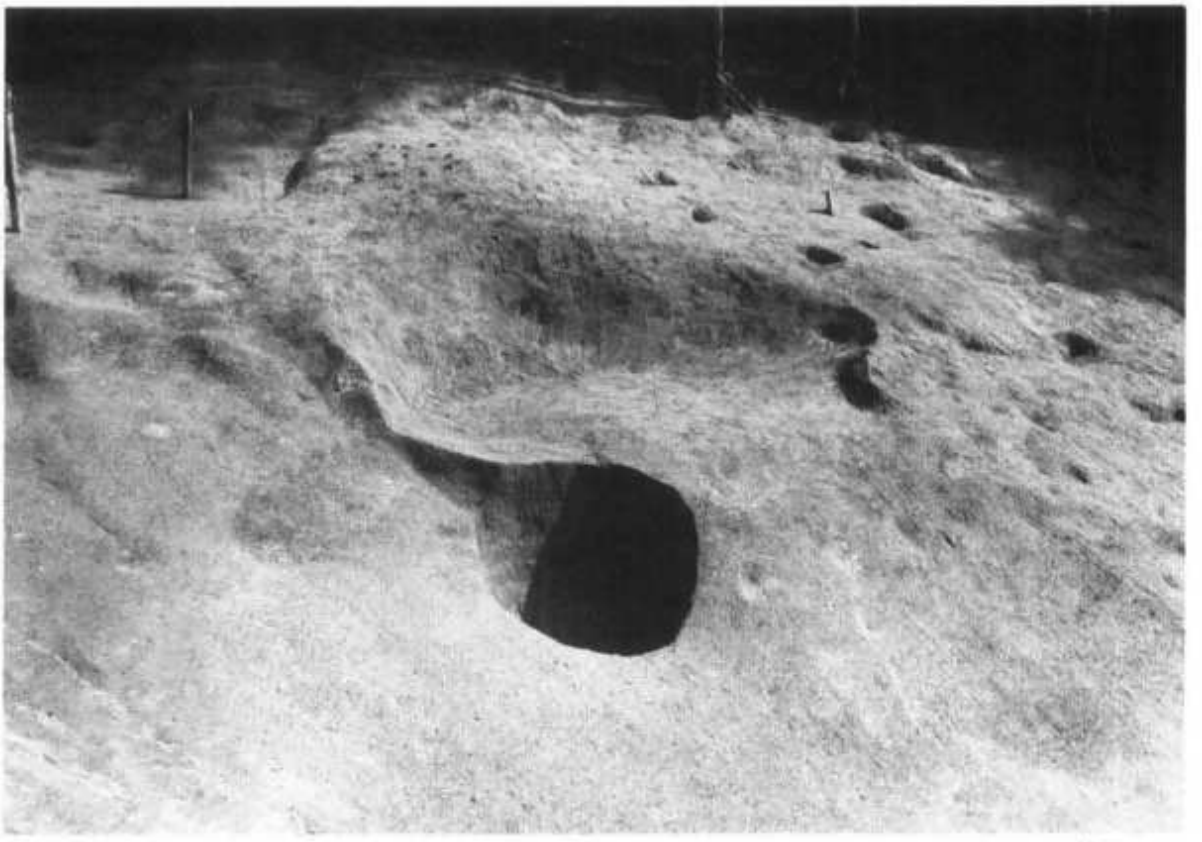
2ST004検出状況

2ST004主体部上面配石検出状況



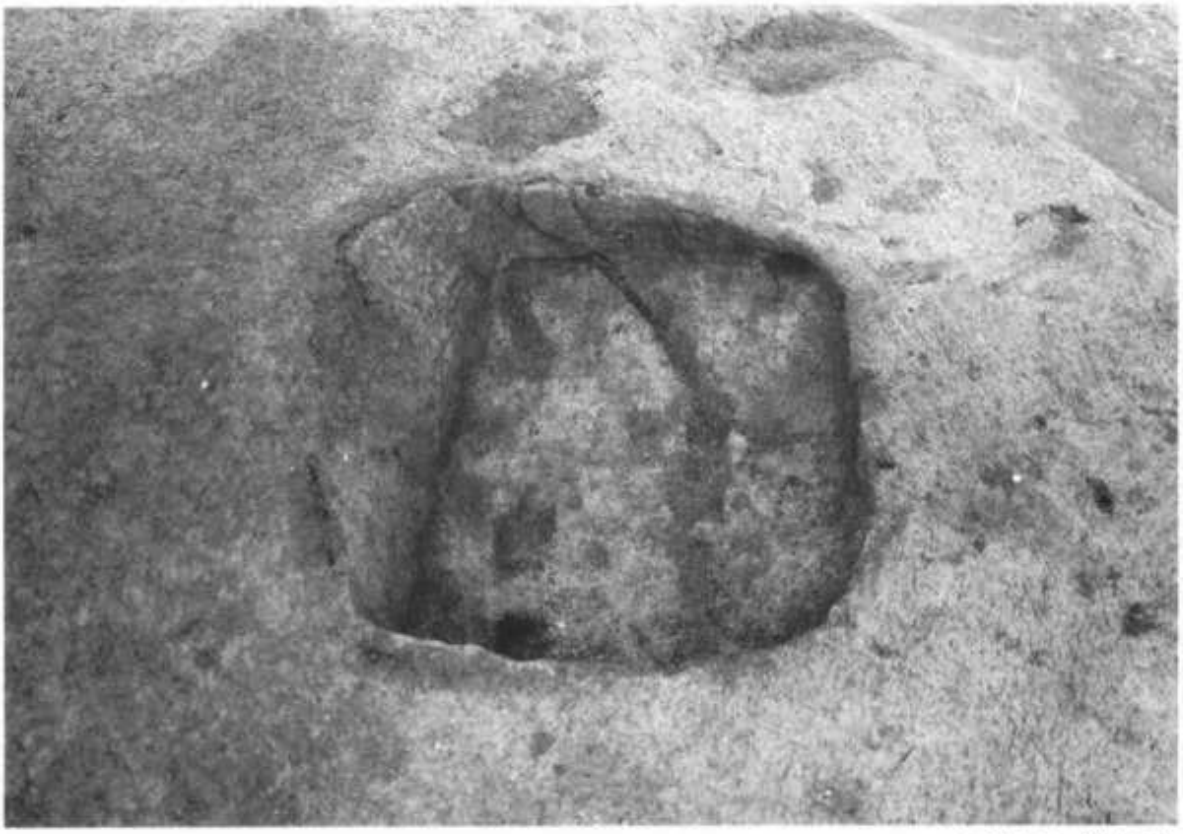
2ST004 主体部完掘状況

2ST004 積土土層観察状況

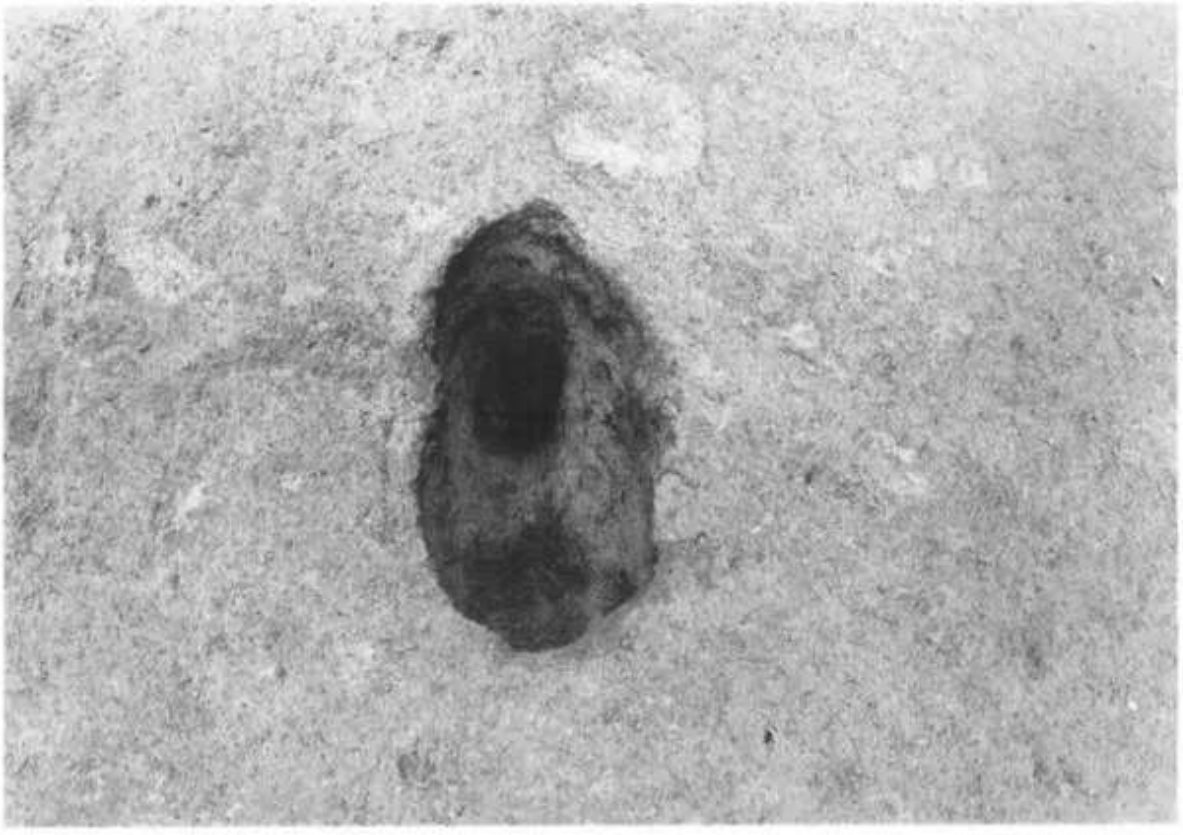


2ST004 完掘状況

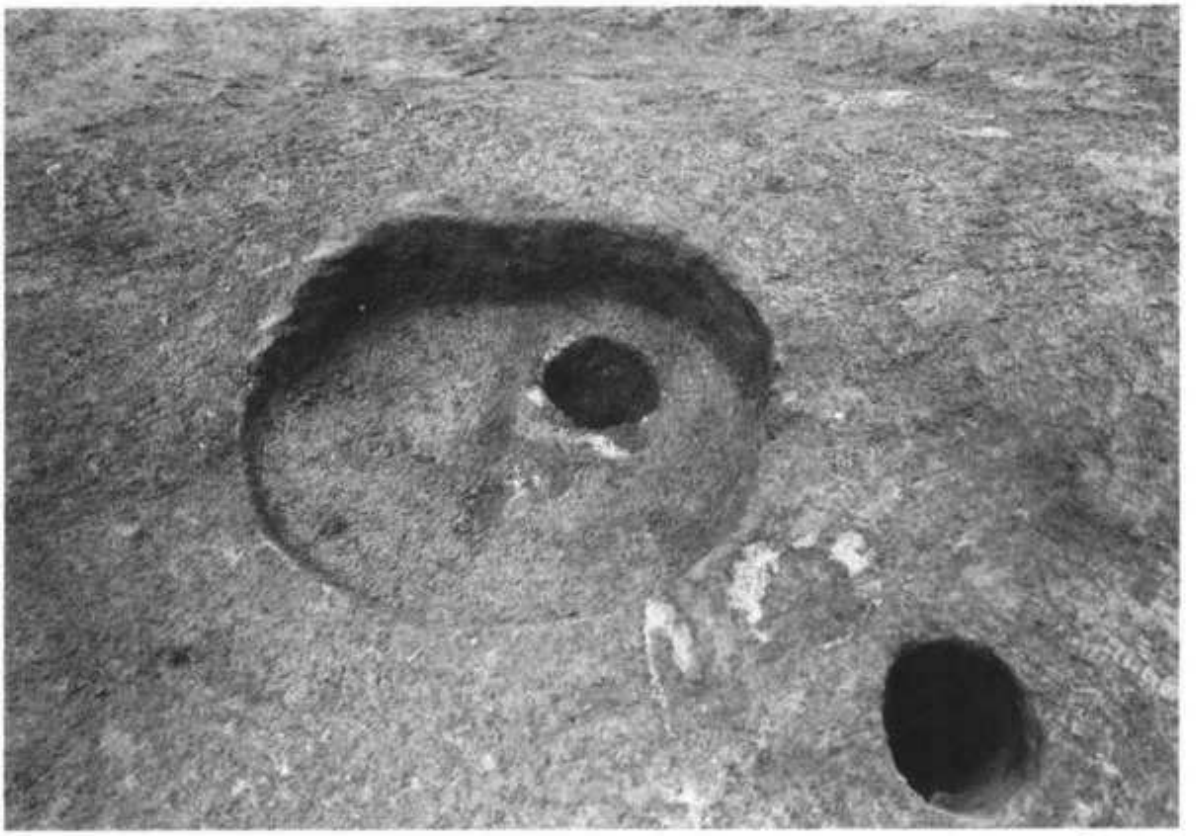
2SX010 検出状況



2SX005（北から）



2SX007（北から）



2SX008（南から）

2SX009（北から）

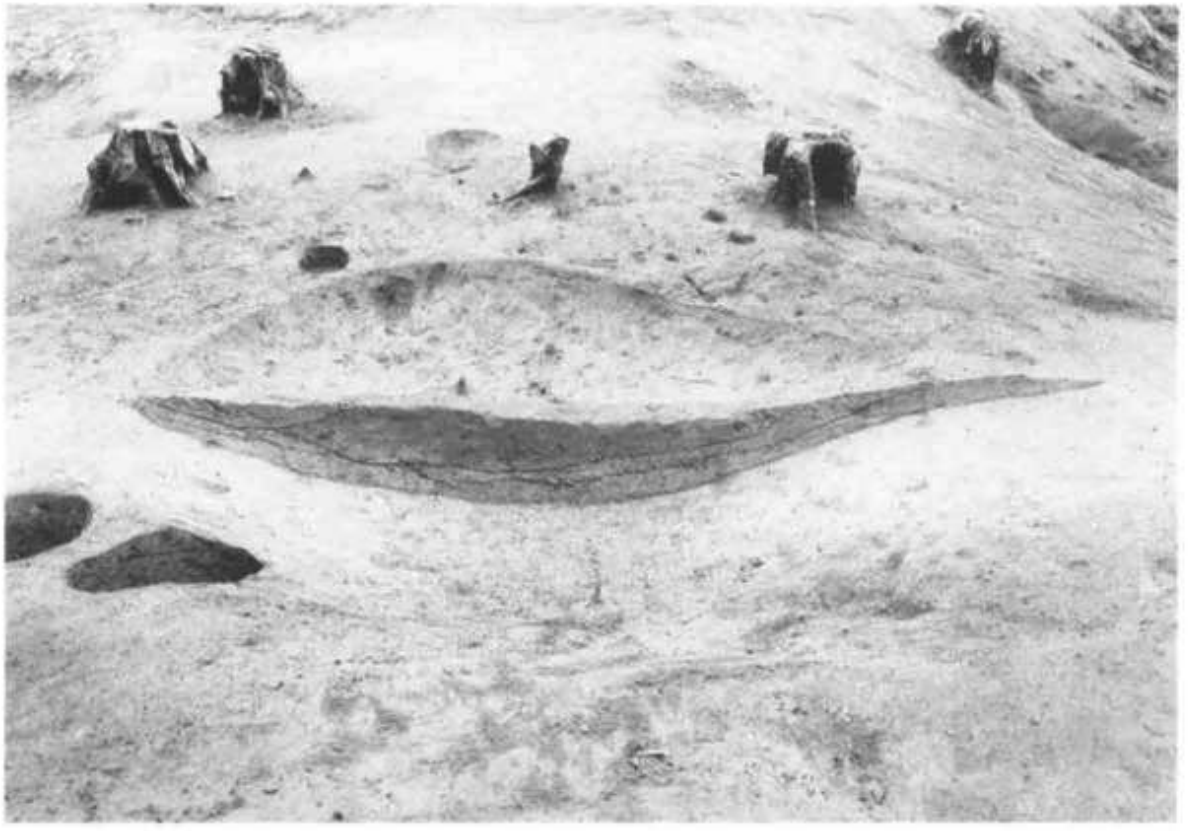
2ST011配石検出状況（北から）

2ST011・014全景

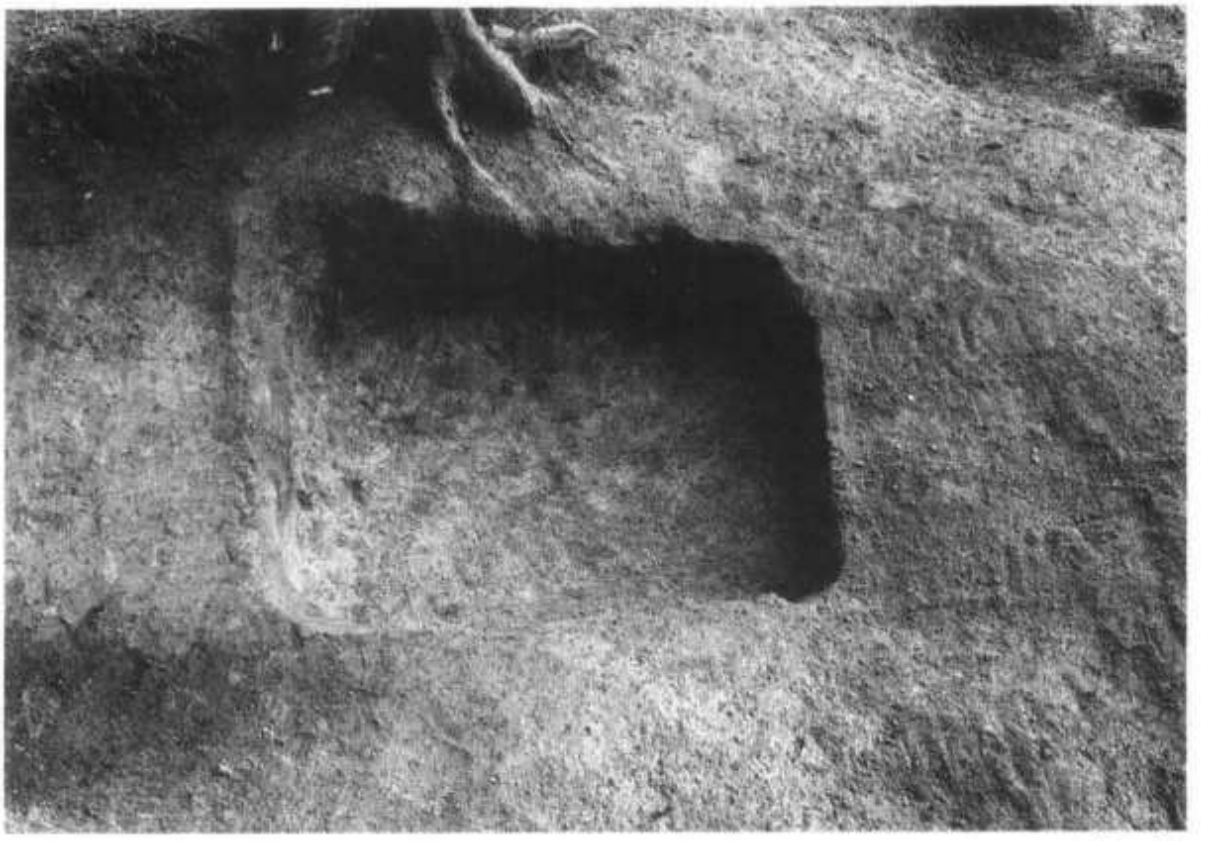
2ST011（右）・014全景

2ST011（右）・014完掘状況

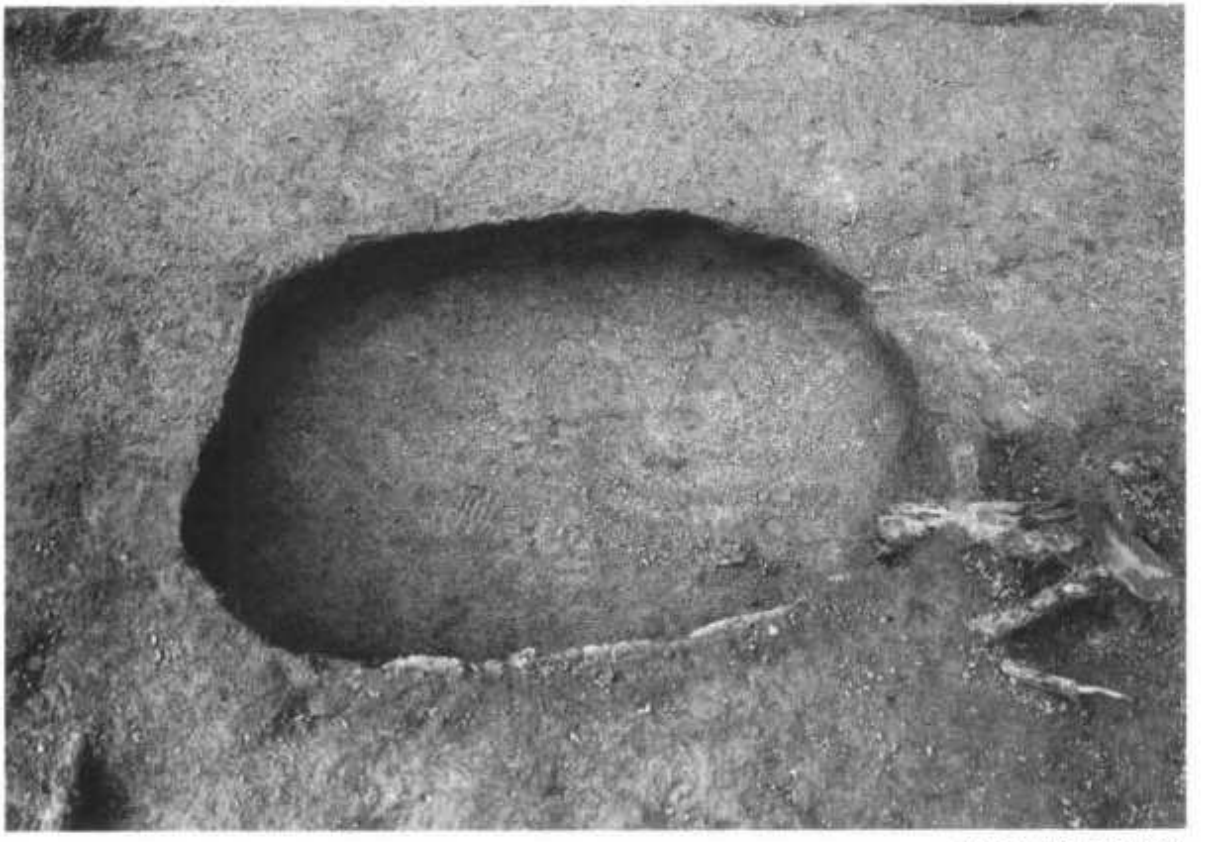
2SK012



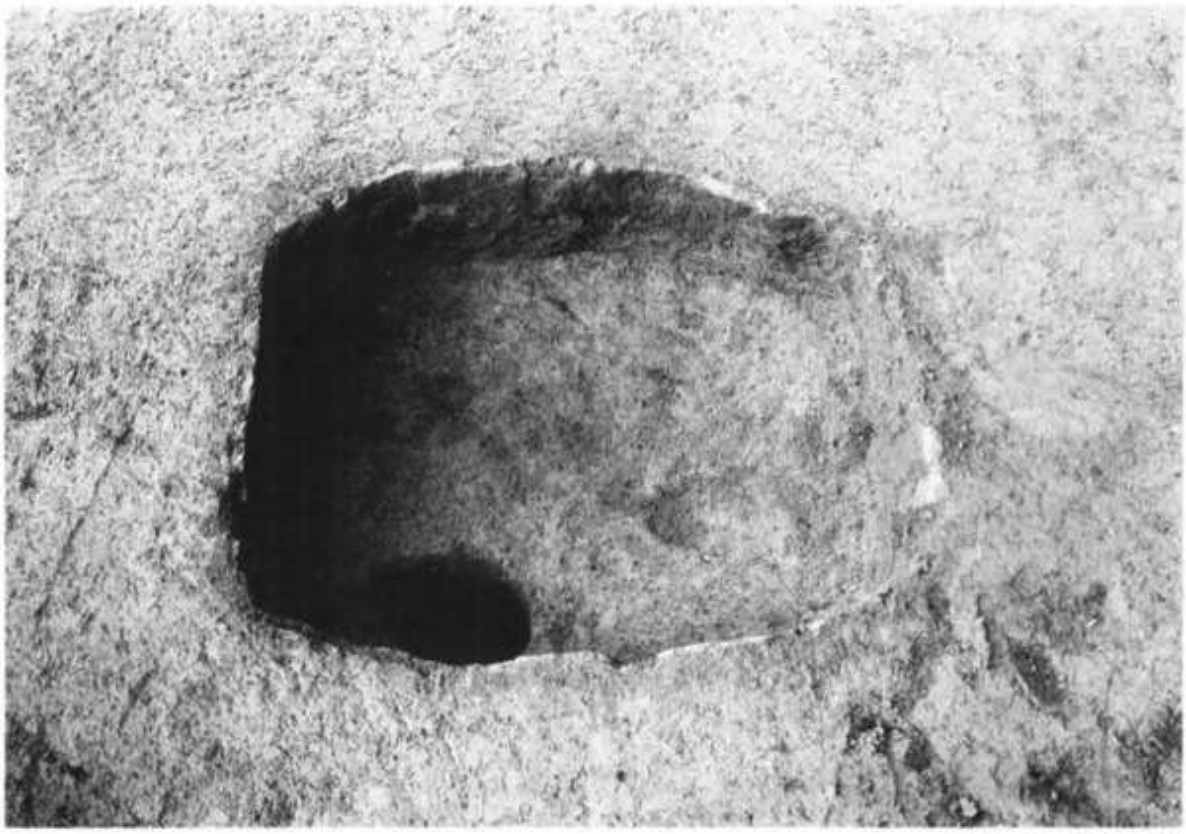
2SK013（土層観察状況）



2SX018（北から）

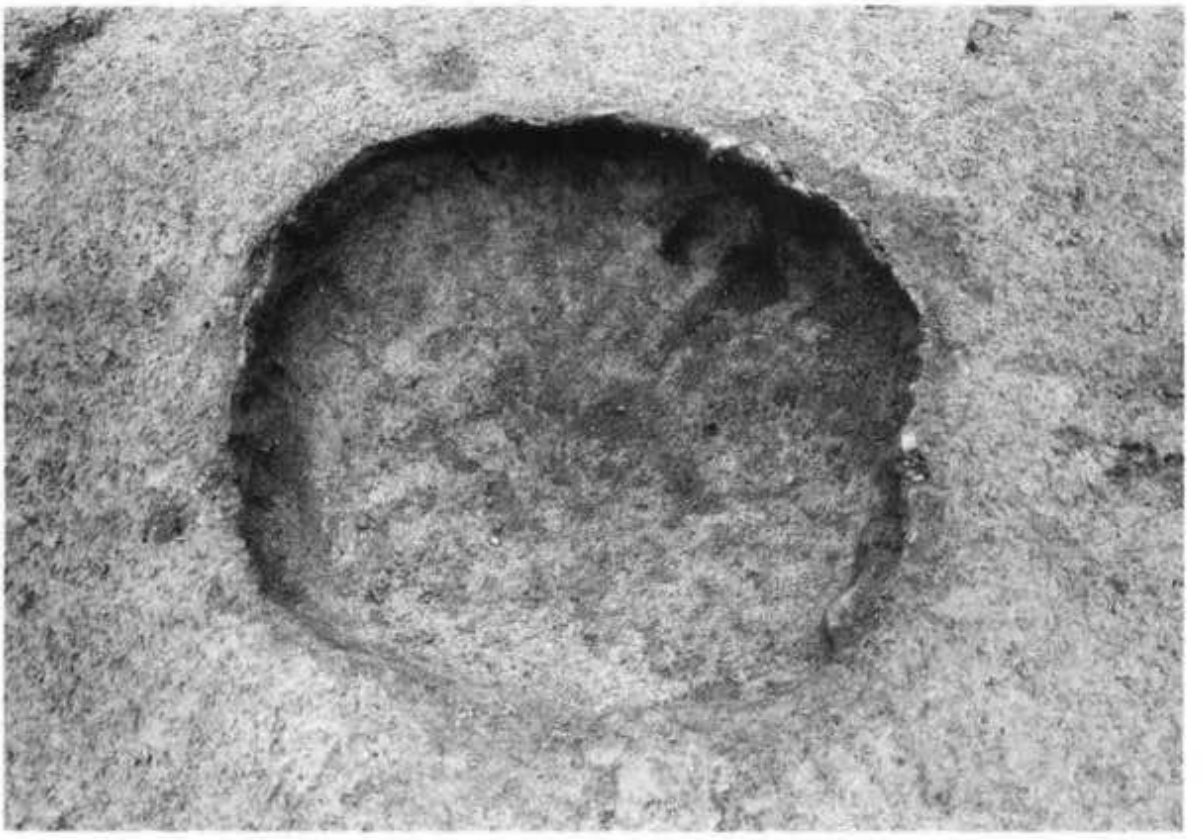


2SX019（南から）

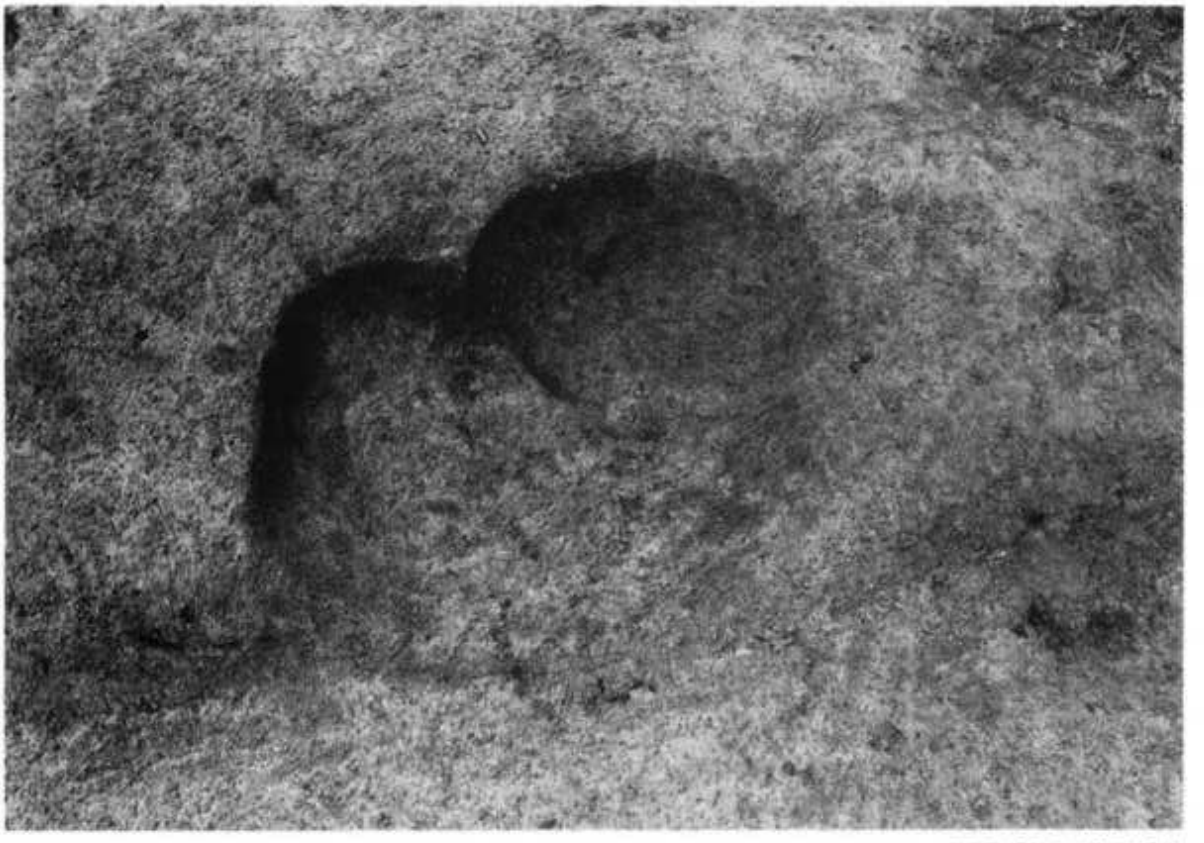


2SX020（南から）

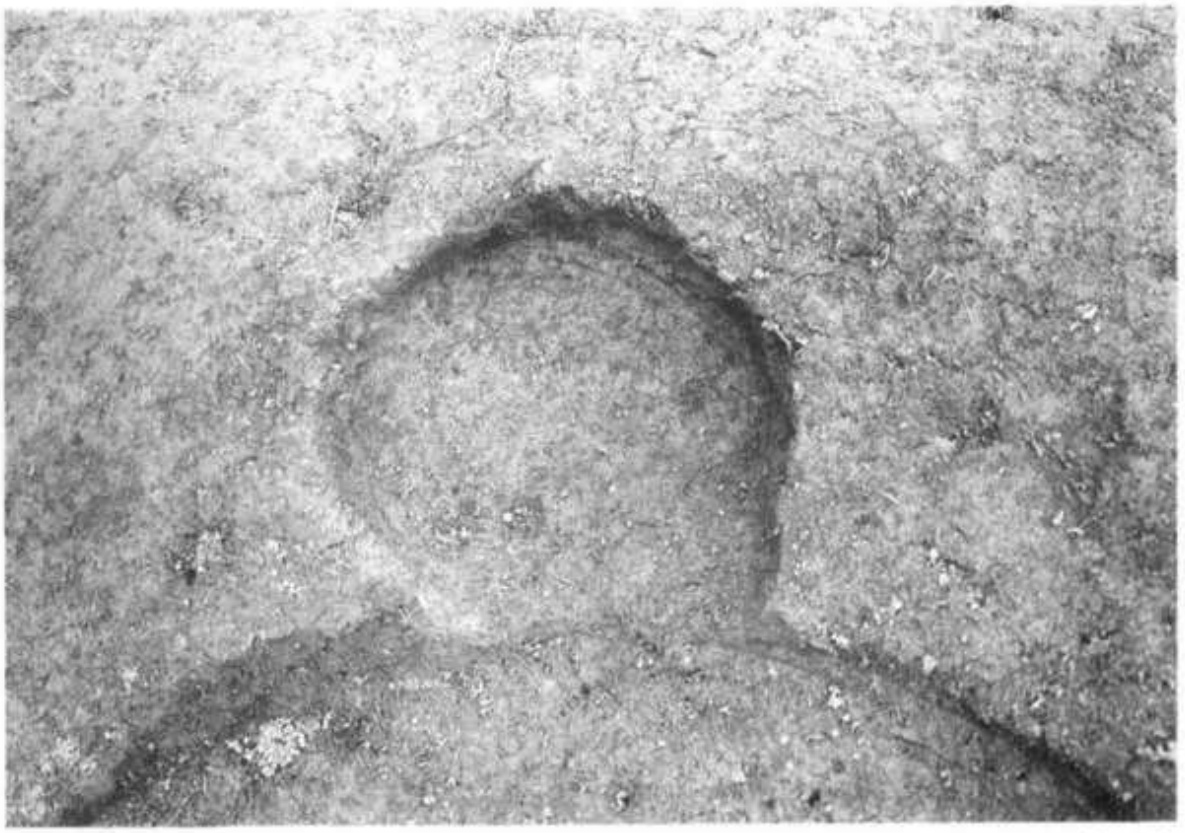
2SX021（南から）



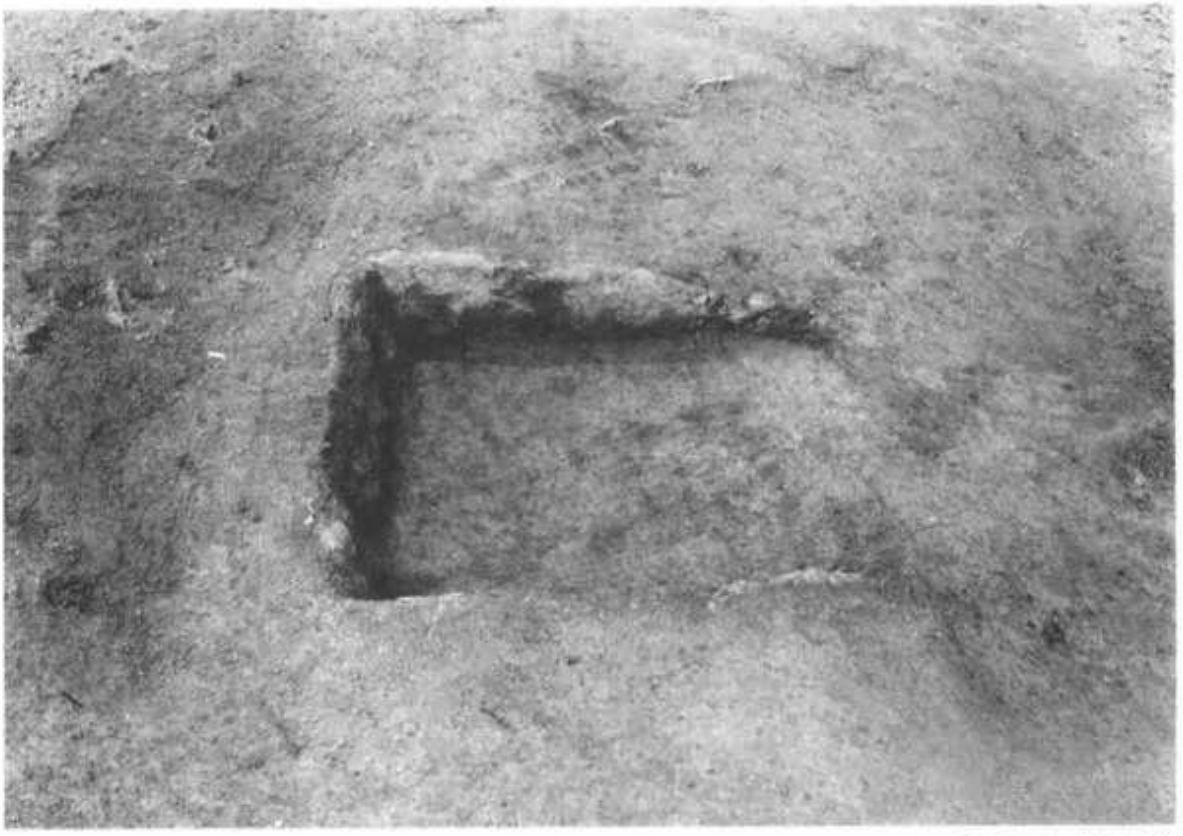
2SX022（南から）



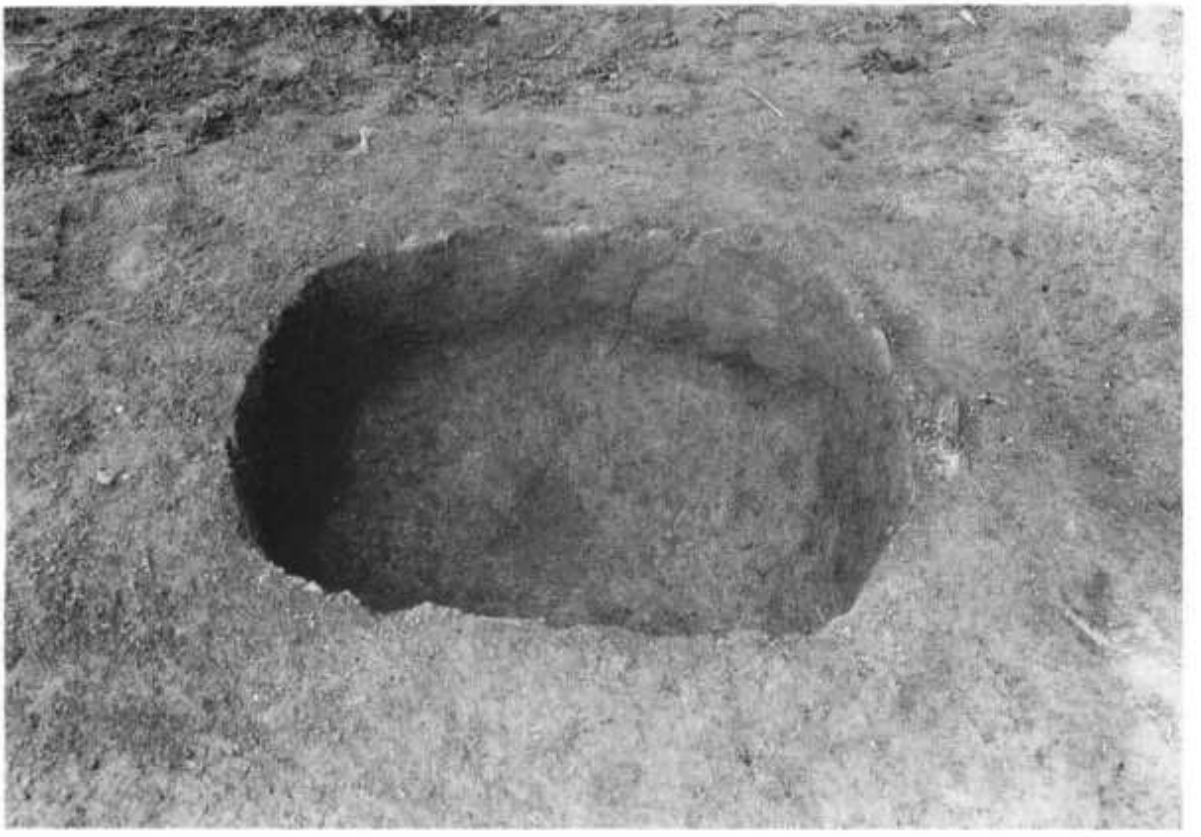
2SX023（南から）



2SX024（東から）



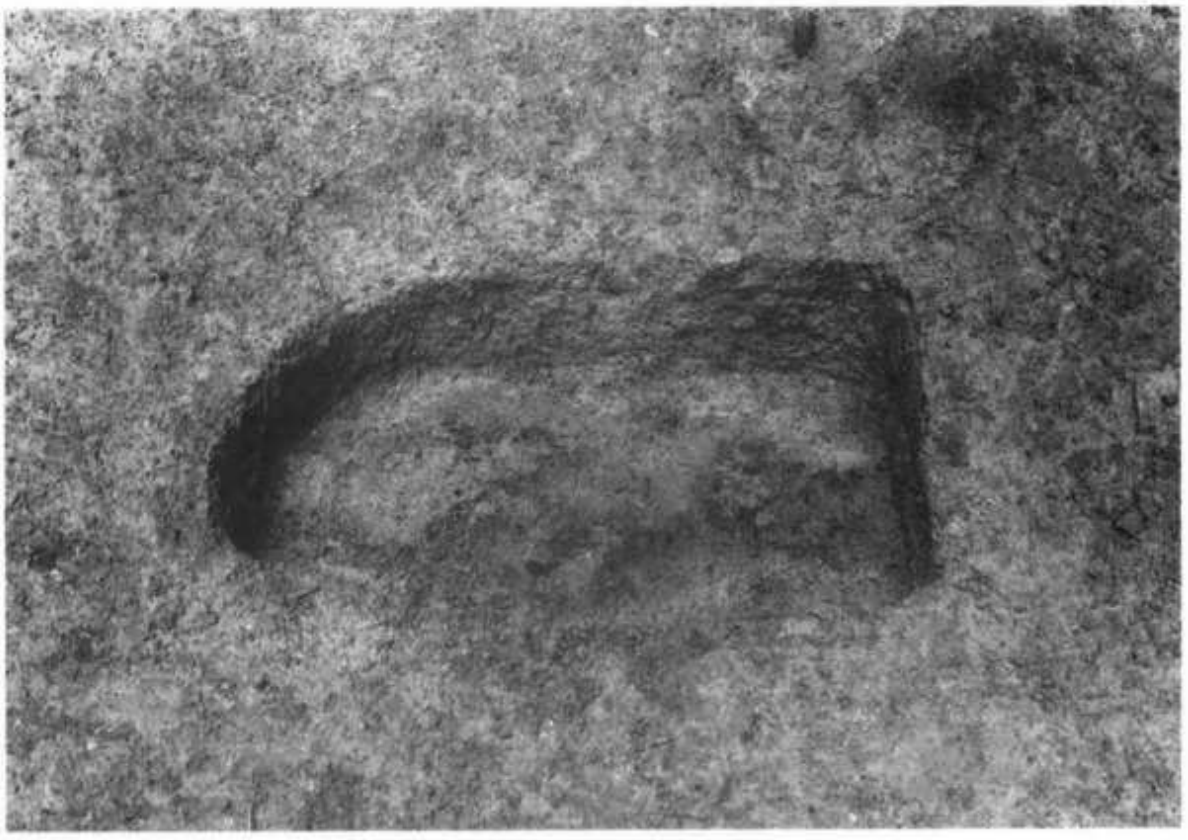
2SX025（東から）



2SX026（北から）

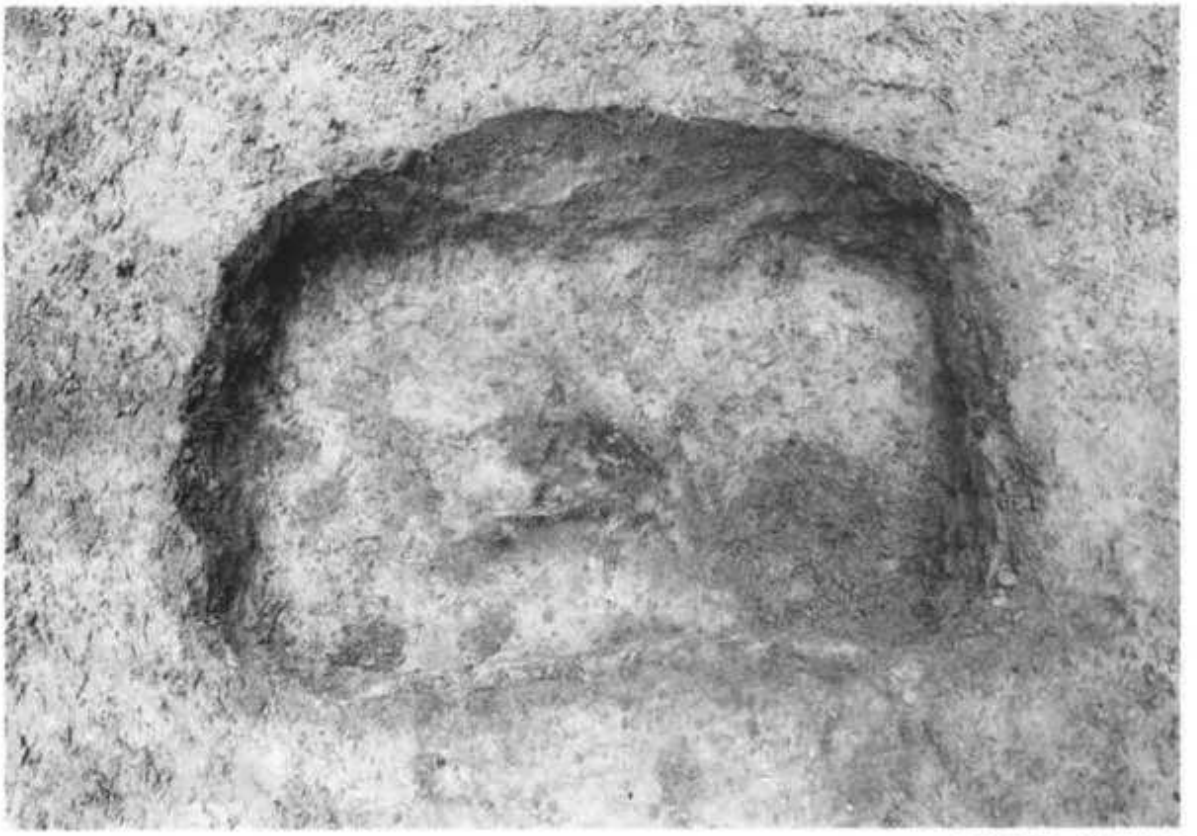
2SX027（北から）

2SX028（北から）

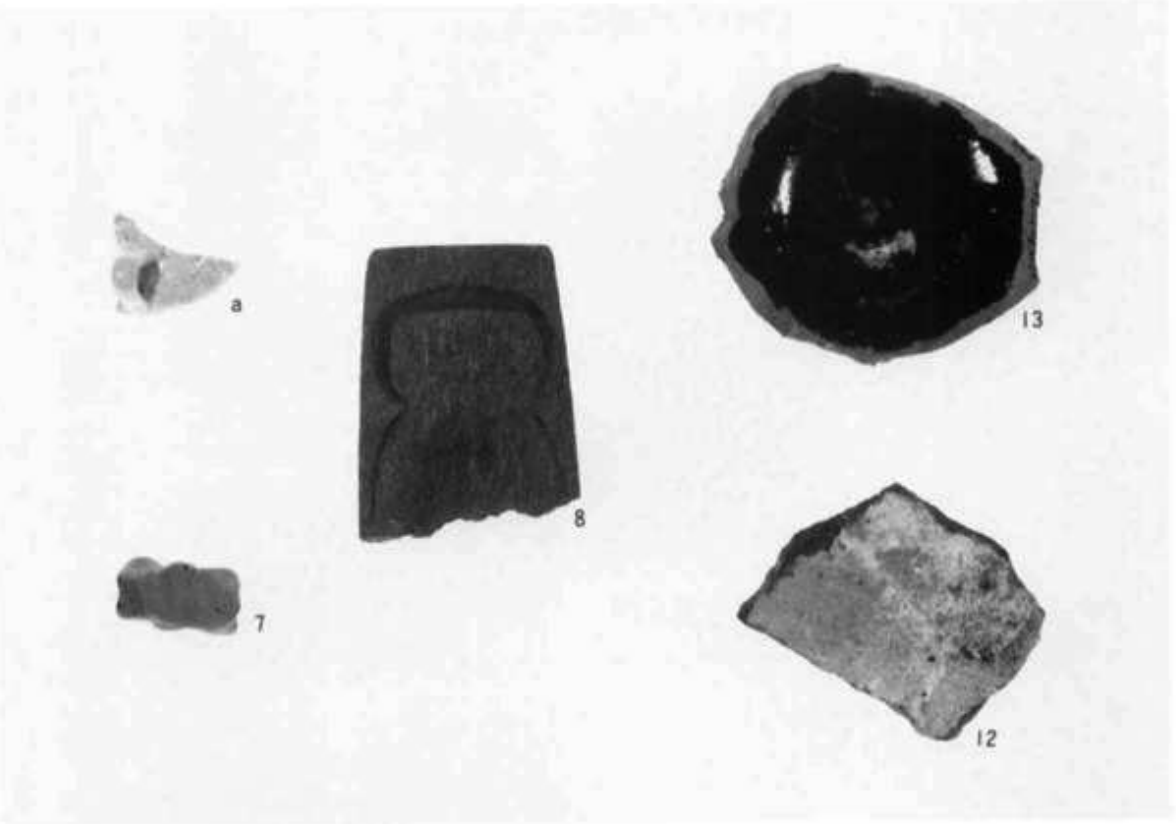


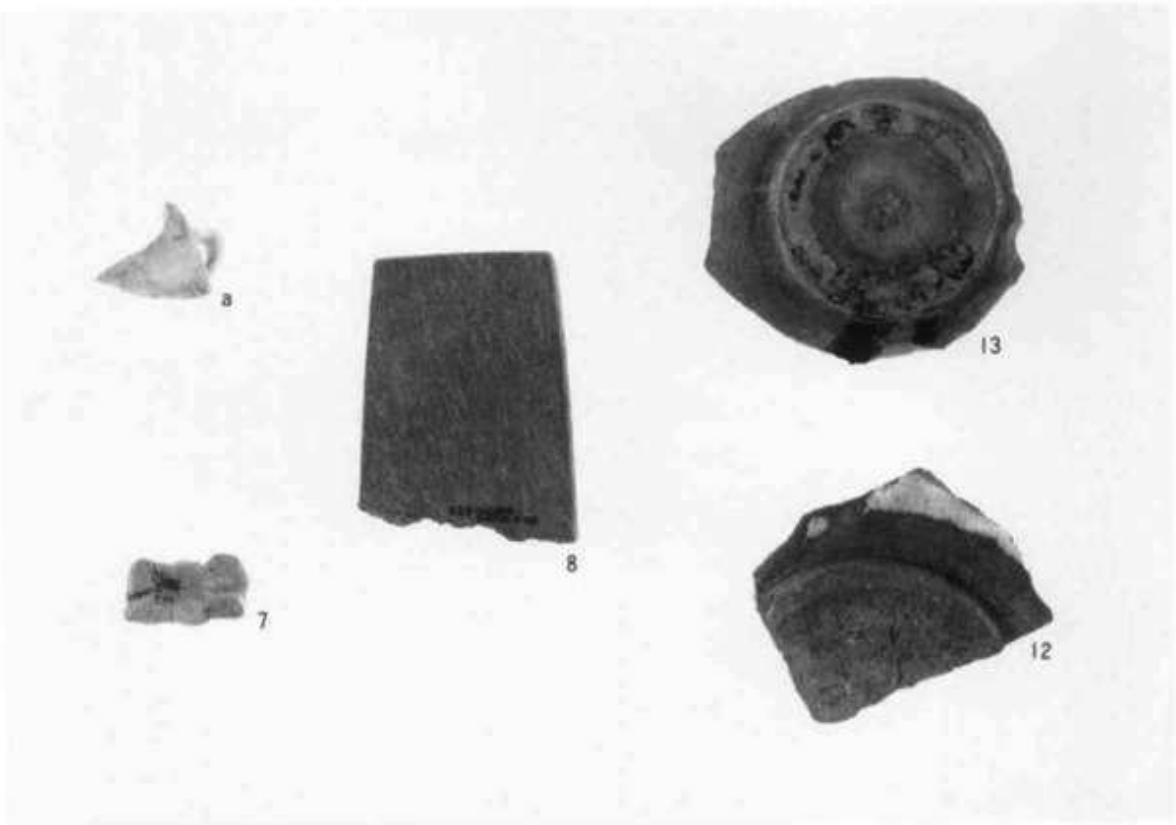
2SX030（北から）

2SX031（北から）



2SX032（北から）





D区出土遺物

太宰府天満宮 II

－太宰府市の文化財　第15集－

平成２年３月30日

発　行　太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺86

印　刷　アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通２丁目９－31